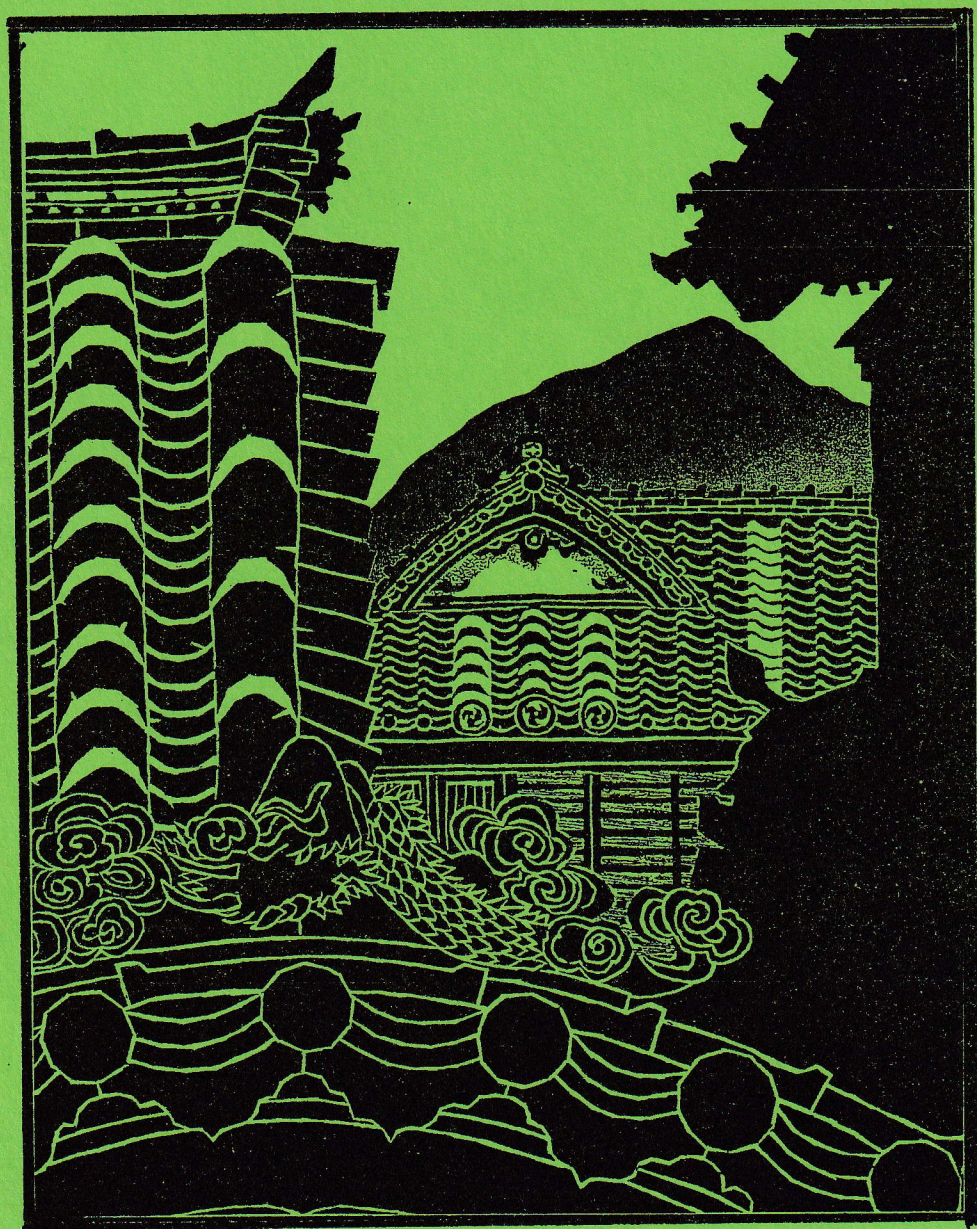


野津原方言集 続 19



「露地」

'83ニース展奨励賞 F20号(73cm×61cm)

表紙画……………、寺司勝次郎

題字……………姫野順子

★ ご協力いただいた皆様 《故人》

内藤忠人。那須量。岡本ナカ。野津原夏子。一華和尚。
佐藤スミ。斎藤定。小野実五郎。杉田信男。山室寿。

松田美香、池田万勇、波多野テル子、斎藤キミエ、佐藤敏子、
柴田文子、大分バスKK、野津原中央公民館、柴田建設KK。
ピーターパン読み聞かせ会。足立勇、田口勲。

★ 使わせていただいた資料など

ふるさとの民話⇒のつはる物語。文化財調査ごぼれ話。
歴史記録会。野津原伝統文化継承会。読み語りクラブ。
世界原色百科事典。一華和尚物語。大分県の百年。月の唄。
野津原文化協会放送部ナレーション部会。

調査スタッフ 《収拾調査、編集、印刷、製本》

小野寿祐、佐藤源治、那須政子、赤星ヨシミ。

平成26年10月

野津原方言調査会 大分市大字竹矢

会長 小野寿祐

☎097-588-0572

もくじ	2
故郷の唄物語	
あんたかたどこさ	5
方言単語『か』行	7
民話、伝承	
姫隠しの悲しい物語	25
一華和尚の力くらべ	27
狸を騙した五助さん	29
方言子どもん世界	
帰って来た宇曾の鬼	31
2キロん米買い	33
負けるが勝ち	35
女性の底力	
祭り餅のお礼	37
豊後岩屋	39
読み聞かせグループ	41
あげな話こげな話	
クルスの願い	43
義経迎えの夢消えて	45
お地蔵さんは子ども好き	45
五助表往還街道物語〈4〉	
山中から石合ロマン	49
天領行政ここにも	53
江戸期のあの頃	53
故郷の味	
カンネ餅	55
サトガラ料理	58
イリコ飯	59

玉手箱	
直入文化残る丹生山	61
報恩納経に捧げる喜び	63
春の季節風 まわり駒	65
あん日あん頃	
故郷戦後昭和20年代	67
民話のつはる物語から	
咳のお地蔵さん	77
工藤三助物語	79
お礼の踊り	83
孝女と大蛇の話	85
報恩かずら	88
道しるべ	89
こぼれはなし	
合えぬ悔しさ	93
野津原夢ロマンの人	95
湛水に水が流れて	97
午とくに寄せて…ヤセウマ	99
伝言板	100



はじめに

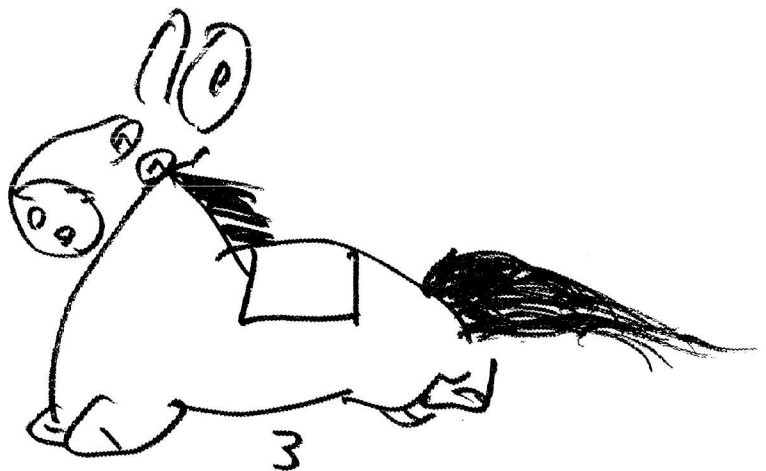
今回は五助さんの 旅人との街道物語は 山中かる石合まじん
楽しい 旅道中になりました。故郷んあげな話 こげな話題なん
かも 入れこんだ おしゃべり道中にゃ 思わず笑いを誘うこと
も 毎度あるけど 憎めない五助さんがん 飄々とした語り
がなんか 親しみう感じるち いわれると嬉しいです。

野津原伝統文化継承会ん 発行した104ページ カラー版の
本にゃ 古い伝承、民話なんかがあっち それに 方言調査会
も お手伝いしましたき そん中ん読み物が 少し掲載しちあり
ます。若い頃に聞いた話 知っちょつた民話 そげなんに ふと
出会うと懐かしい 記憶とともに若がえりそう。

方言単語は『か』の 項かる掲載 今回は『こ』まじ進んで
合計が14266語になりました。こんまま進んだ時にゃ 終わ
りにゃ約45000語ぐれに なるかん知れません。

戦後ん農作業 20年代ん『あれこればなし』 さあ仲間に入
っち《カタル》 シャベロウナ。

いつも ご愛読を厚く お礼申しあげます。お元気な日々を
お祈り申しています。ご自愛の程を。



取り組んで25年になりました。単語は約17000語になりましたが 最終的にゃ47000語ぐれまじ 行きそう。

ネガイイ⇒値段がいい、値段が高い、正直者でおとなしい、
根元がしっかりしている、もともとよい製品。

こげんふうに 同じ単語でん 上下に連なる言葉によっち 意味
が変わっち来ます。そげな解説がちーた 単語が毎回分割しち
掲載してあります。こんかいも『か』の項です。

故郷ん宝の玉手箱⇒珍しい、貴重品、素晴らしい人材、遺跡、
思わず好奇心も 湧きそうな話。

味⇒故郷に伝わる食文化 あん頃食べた あん時に作った
よばれた みやげに貰った なんかも

女性の底力⇒家庭を守り戦争時代も 子育てに母性本能が
影武者として あんな話 こげな人も。

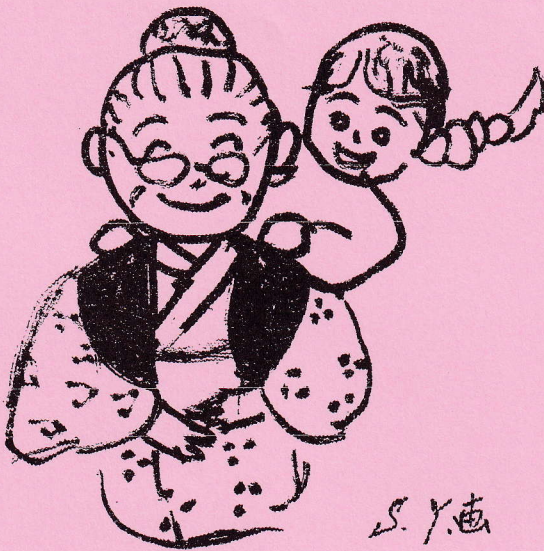
伝承、民話⇒古くからの民話が語りつがれ 伝承文化が
ひっそり心を 和ませる。

五助街道物語⇒肥後移動ん5回シリーズに続く 表往還街道ん
442号線ぬ 小岩戸かる荒木谷じ 5回
シリーズ 今回は山中かる石合まじ。

子どもん世界は⇒読み聞かせから 子ども向けの方言入り本の
中かに3編を。

毎回ご愛読を誠にありがとうございます。ご自愛なさって次回
も又 お会いできるのを 楽しみにしています。

古・唄



古い唄…あんた方どこさ

昭和3年頃にダイタイん事が 解ったごたる。丹辺恭平さんが《ニベキョウヘイ》 坪井川添いじ染物扱いを 10代にわたっちしよっち こん頃かるはやりよったが 大元は参勤交代じ江戸詰めん 武士や女中が故郷恋しさに 唄いよったんを持ち帰っち それがはやり出したごたる。とも言われる。

江戸じゃ交流なんかもあっち 次々に覚えたしも 又教えたりするきソゲナしたちん 口かる伝わったり 結婚なんかじ広がることもあっち 調子んいいリズム感覚が そりゅう一層進めた。運の唄じゃつたんかん知れん。船場たあ船がつく所じゃが 舟ち言うとなが乗り降りする コンメー舟。船になりゃ荷物ん運び役ん 大きな船じゃが 加藤清正は開運にも 長けちよつたき船ん往来は ガイトあつたらしい。

『さ』ちつく言葉は やっぱ江戸言葉じゃろう。じゃき江戸じ唄いでたな ゆう解るし 熊本じ作つたんは エビん代わりに狸がおったり 時代ん流れんなかじでん 唄い易い歌詞に変わったんも 頷けるような気もする。全国的に広がつたのん 清正ん人がらから広がる そげな風潮もあつたそう。

地方に広がると 手まり唄になるとこんだ 子どもから広がる親近感が そりゅうさらに推し進めち よそん国ん唄を唄うと チット上品にも聞こゆる 人間の欲望が又 広がる連鎖反応も。じゃもんじゃき 野津原に來た時にゃ 歌詞もチット変わちよるけんど誰も悪う 言うしもおらんき そんままはいはいと。

歌詞は2番まじじゃが 場所により国が違ひよつた 昔はもちつと違ひよつたんかん 知れんけんどのソリヤそれなりん 味もあつちいいもんでんある。それが民謡でんあるあなえ。

熊本じゃ洗場をセンバとん言う。そん洗い場があると センバち呼ぶんも親しみがある。じゃきそん川にゃ エビもおったんじやろう それとんフナ、コイ、ウナギ、とにかく網じ取るこちなる。煮て 焼いて 食べちしまう……『うまささささ』 いかにも美味しかったと 微笑む姿が目に浮かぶ。

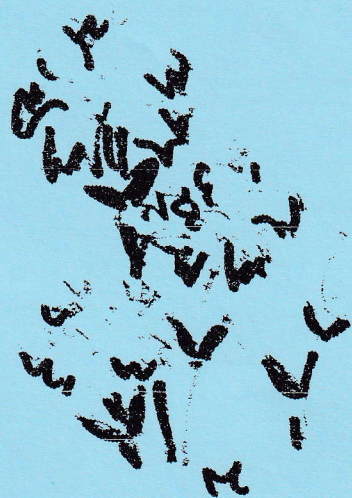
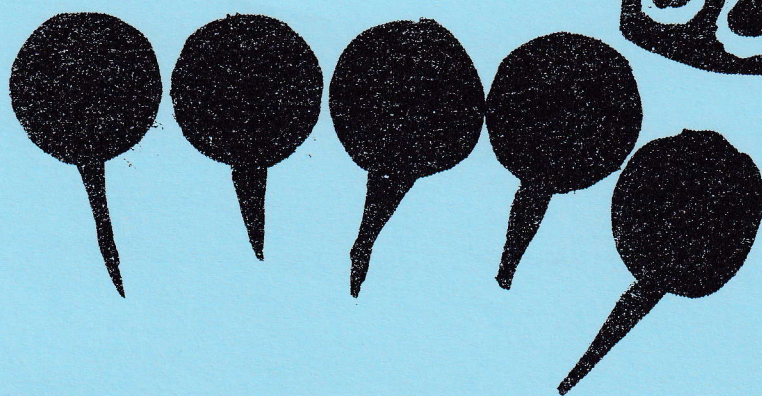
あんた方どこさ 肥後さ
肥後どこさ 熊本さ
熊本どこさ 船場さ
船場川には エビさがおってさ
それを漁師が 網さでとってさ
煮てさ 食ってさ うまささささ。

あんた方どこさ 肥後さ
肥後どこさ 熊本さ
熊本どこさ 船場さ
船場山には 狸がおってさ
それを獵師が 鉄砲で撃ってさ 《アミチャデとん唄う》
煮てさ 食ってさ まさがさささ。

方言説明 ダイタイン…おおよそは。しよった…していた。よったんを…唄っていたのを。ごたる…ようです。ソゲナ…そんな。コンメー…小さな。ガイト…たくさん。やっば…やはり。そりゅう…それを。おらんき…いなてので。けんど…けれども。民謡…故郷に生まれ育った唄で 労働唄とも言えるが 生活ん声かも知れんごたる。歌詞に込められた意味合いは まさに人間の生きざまが 込められちよるごたる。先人が守り育てた大切な 宝物ですから これからも大切にして ながく生きて来た人たちの 気持ちに感謝したいもんです。唄ん意味から察するに比較的 当時の時代は落ち着いていた そんな時代の唄であった 肥後の平和時代が続いていた そんな感じがして嬉しいことです。



學言方 語



方言こそドコマジン行く 来るもんじゃきイツンナカメーカ
江戸ん『さ』が肥後ん熊本ち 連れのうちそん途中じ へえもう
野津原にも 根づいちよる。“あんた方どこさ 肥後さ 肥後ど
こさ 熊本さ 熊本どこさ 船場さ 船場山にわ 狸がおってさ
……とまゝ 『さ』がガイト使われ 唄われちよる。

今回は『け』の『モ』ん所じゃが 前ん残りが出ちきたき こ
き一チット並べました。

カタデ……………ほかの仕事をしながらにする。片手間に。
カタゲマエーチ……………担いで回った。担いでうろうろする。
カタテマ……………かたっぽの仕事の間を利用して。
カタチンバ……………長い短いがある物。箸が少し長い短いが。
カタズラ……………片面の。反対側。 カーブのある橋の欄干。
カタンナ……………加わらないがよい。加えてあげない。
カタメグジュ……………嫌って疎外する。仲間はずれにする。
カタヒラ……………片側の。反対側の。半分の場合も。
カタッテン……………加えても。仲間に入っても。
カタン……………どこそこの家の。誰だれさんの家の。お前の家の。
カタレンゴツ……………加えられないように。入られないような。
カタナシ……………面目丸潰れ。失敗して顔も見せられない。

け ケモアルキ……………心配せんでも毛はあります、毛がないと心配。
ケモイジ……………蹴って落としてしまう、蹴ったために壊して。
ケモウチョル……………どうやら死んだよう、落命したのでは。
ケモネエゴツ……………あるものまでないように、まるで無意味な。
ケヤラヒゲヤラ……………毛なんか髭なのか解りにくい。
ケヤリャ……………蹴って散らかすと、蹴って飛ばすと。
ケユリャセンカ……………消えるのではない。消えないか心配。
ケユルニ……………きえそうなので、消えるかもしれないが。
ケユルカン……………消えるかも、消えてしまいそう、消えるのでは。

け ケユルトキャ……………消える時には、消えた時には。
ケユータ……………真剣酔ってしまった、意地悪く酔う。
ケワッチ……………受け持ちを請け失敗。思い通り出来ず。
ケワノーデン……………毛はなくても、あるべきものがなくても。
ケワルト……………失敗したら大変、失敗しないように。
ケワノーナル……………毛はなくなるが、気持ちはなくなったよう。
ケンドイイド……………けれどもよいです、仕方がないだろう。
ケンツキテッポー……………空振りに終わるが、見せかけの仕種。
ケンツウ……………嫌われ者、気質が悪いので、変わり者と。
ケン……………言うけん、食うけん、ふくけん、などに使う…から。

ケンナンナ……………蹴りなさんな、蹴らないで。
ケンデン……………その話で、あん時の事で、あれからの。
ケンコスリャ……………喧嘩をすれば、喧嘩をしたばかりに。
ケンチイシ……………見地する際の基本点にある石。
ケントオ……………見当てにしたもの。見さざめたからの結果。
ケンメ……………懸命に、頑張った、真剣に取り組んだ。
ケンチャン……………中国から渡来の精進料理。
ケンケン……………意地悪く腹立てする、起こり上戸。
ケング……………あっちこっち、見当つかぬ、素人の慌て者。
ケンチョロ……………こそこそしている、じっとしてない性格。

ケラケラ……………粕笑いする性格、意味のない笑い方。
ケラルリャ……………蹴られると、けられたのなら、蹴られた戻し。
ケラレテン……………蹴られても、蹴られたのに素知らぬ。
ケランジョケ……………蹴りなさんな、蹴ったりしないように。
ケラリュウト……………蹴られても、蹴られた所で知れている。
ケリュウ……………区切りを、後始末を、これで終わりに。
ケリマエーチ……………蹴り乱暴したが。
ケリヤツツケタカ……………蹴って降参させたか。
ケリアグル……………蹴って勝負あったが、果たしてその気持ちは。



け ケリタガル……………蹴りたいようで、蹴りたい希望者。
 ケリヤガッタ……………蹴っていじめた、蹴ってうまく点数稼ぎ。
 ケルケン……………蹴りますから、蹴ってもよいですか。
 ケルンカ……………蹴りますか、蹴ってもようけれど。
 ケルダケデン……………蹴るだけでも、蹴ることで自身も。
 ケルゴタリャ……………蹴るようなら、蹴るのであれば。
 ケルフリュ……………蹴る格好で欺く、蹴る真似をする。
 ケルナライド……………蹴るのであればよいから、蹴ってもよい。
 ケルカンシレン……………蹴るかも知れないから。
 ケルター……………蹴るとは、蹴るなら早めに。



ケレートン……………蹴りますが、蹴れますから。
 ケレードチ……………蹴るような欲で、蹴りますよ。
 ケレンジャロウ……………蹴れないだろう、蹴りは無理。
 ケレレン……………蹴れないでしょう、蹴るのは無理だろう。
 ケロットシチ……………白けた顔色で、素知らぬ顔をして。
 ケロモンナラ……………蹴れるものなら、蹴るのはどうだろうか。
 ケロドチ……………蹴る準備ができたが、蹴るかもしれないよ。
 ケロケロ……………蛙が泣いているよ、涼しそうな鳴き声が。

こ コーダゴツ……………香りをかいだように、鼻をかみましたが。
 ゴーソーガ……………ごみがたまって、不用品がいっぱいに。
 コーシチミリャ……………この様にして見ると、考えてみると。
 コーケリャ……………このように蹴ると、こっちから蹴ると。
 コーシテン……………このようにしても、こんなふうにしたら。
 コークリャ……………このように来たか、この手があったか。
 コアリュウカ……………壊れるだろうか、両替できないだろうか。
 コアユ……………粉合えの料理、こあえ食べて、こあえを持参したよ。
 コアエデン……………こあえでも、こあえたべませんか。
 コアジュ……………小さな鱒を、小さな畦道を、小さな畦を作る。
 コアメシュ……………おこわ飯、赤飯のお返し祝い、餅米いり飯。

こ コイヂクンナ……こぎ落としてください、雑穀してください。
コイサデン………今晚でもようので、今晚お願いします。
コイジクル………引き抜いてきます、収穫してくる、収穫する。
コイジョケ………引き抜いておいて、雑穀しておいて。
コイグチュ………酒の絞りはじめを、濃いいめの飲み物。
コイグレワ………これくらいは、恋ぐらいは、濃いくらいは。
コイタグ………肥運びようの桶、下肥運搬用の桶。
コイワズロ………恋の悩みの病気、恋の病になって。
コイジョク………こいでおきます、雑穀しておきます。
コイツ………これは、この場合は、これです、この物は。

コウスリヤ………このようにすれば、こうしたらどうです。
コウサンシチ………参った、負けました、降参しますから。
コウデンセント………こうでもしないと、こうしないと困るので。
コウナリヤモウ………こうなれば仕方ない、よいようにおまかせ。
コウチョケ………飼いなさい、買いなさい、買ったらどう。
コウシチャリヤ………このようにすれば、こうしてみたら。
コウナンナドゲ………こうなるのはどう、こんな結果はどうです。
コウセント………このようにしないと、こうすれば結果が。
コウソゲ………このようにそいだら、こんな方法でそぐ。
コエリヤイイチ………越えたらよいのでは、越えることで。

コエクロウチ………肥えて大丈夫、肥満体になって。
コエキラン………肥えないので、病気ではやせてしまって。
コエクレタモン………よくもまゝ肥えて、肥満で大丈夫。
コエケーチ………肥えたのはよいが、少し肥満ではないの。
コエデンダセ………肥やしをだして、肥やし出しをお願い。
コエカルサキ………声からだすこと、発声練習が大事だが。
コエチョリヤ………肥えていれば、痩せたのよりもいいのでは。
コエガオモド………声がおもだから、発声練習が基本。
コエガカレチョル………声が痛んでいるよう、喉に気をつけて。

こ コエトラレチ……声がかすれて、声をいためて、音声が悪い。
コエガシビー……声が波い唄い方、民謡向きの声帯、奥深い声。
コエガキネード……感高い声、細い声、特殊に聞こえる声。
コエタグ……肥やしの入った肥桶、液肥を運ぶ桶。
コエタガ……液肥の入った桶は、…知らないか。質問する場合。
ゴオソウ……ごみなど、雑多な物の総称、整理してない物。
ゴウツクバル……意地っ志張り、意見が噛み合わぬ。
コオタヌ……買ったものを、買って来た物は、それをだして。
コオランウチ……凍らないうちに、凍れば傷むから早めに。
コオロート……凍ったとしても、凍っても構わない。

コウデンセニャ……このようにしないと、こうしておけば。
コオチキタ……買って来たので、買ってきましたよ。
コオミリャセンリョ……このように見ると千両美人、見方で特。
コオチョク……買っておきなさい、買っておけば役立つから。
コオテン……買ってもしゃないかも、買ってもしゃないでは。
コガタン……小さな形の、小さな物だから。
コガタノ……小さい品物だから、失わないようにしないと。
コガロウ……鋤の器具、土地の鋤お越しに利用する。
コガサンゴツ……焦がさないように、焦がすと品が悪くなる。
コガシ……麦を煎って粉にした食べ物、ハックイノ粉。

コガスナ……焦がさないように、焦がすと匂いが気になる。
コガセ……焦がして香りつけを、焦がれた底飯はおいしい。
コガレドマ……焦がしたのを好きな人も、焦がれた底飯は美味。
コガレタナ……焦がしたものは好きな人に、好みがあるから。
コカルイ……子供をおんぶした子守、子守も腹が空いたか。
コカルサキ……これから先は、この先は通行止め、工事中です。
コカアトオシイ……ここは通してほしいが、ここも無理ですか。
コカトウセン……ここは通れません、交通止めです。
コカルサキヤ……これから先は通れません、この先危険です。

こ コキ……ここに、こん場所に、この場所、位置などの原点。
コキオイチョケ……ここに置いてください、ここに保管する。
コキデン……ここにでも、このぼしょにでも保管して。
コキザミ……小さく刻む、小さく微動する、恐怖心で身震い。
コキカカル……ここから始める、ここに傾けて、ここが始点。
コクモチット……ここをも少し、ここを少し修正して。
コクリャ……転んだなら、転んだので、転んだなら手を。
コクミリャ……よく見ると、このへんを見ると、直視すれば。
コグキー……こぎますから、こいでもよいですか。
コグル……潜って、潜って行きます、くぐり抜けて。

コケマル……垢で汚れて、汚れがひどくて、不潔な様相。
コゲーマジ……こんなにまでして、こんなに世話になり。
コゲコゲ……こんなふうで、これこれですから。
コケマワッチ……転げ回って、嬉しさを全身で表す。
コケタナ……転んだのですね。転びましたか、転んだなら。
コケメドチ……転ぶまいと、用心したのに転んだ。
コゲンコター……こんな事は恥ずかしい、こんな失態をして。
コゲアルタ……こんなにあるものだから、こんな事になる。
コゲマジ……こんなにまでして、こんなに気の毒な。
コゲン……こんな、このような事が、このよう、こんなに。

コケコッコ……ニワトリ、養鶏の、鶏の異名。
コケチ……転んで、転んだ弾みに、転びはずかしい事。
コケテン……転んでも、転んで何か拾ったの、すぐ立ち上る。
コゲーデン……こんなにでも、このようにしてでも。
コゲスリャ……こんなにすれば、こうすればよいのでは。
コゲチョル……焦げているようです、焦げてますよ。
コゲスリャ……こんなにすれば、このようにしたら。
コケタナイイガ……転んだはずみに拾い物、転んで捻挫する。
コケクウジ……転んで恥さらな、転んで怪我して大事。



こ ココジ……………ここで、ここらあたりで、この場所で、この場。
ココラ……………この場所、このへんでは、このあたりの場所。
ココカル……………この場所から、この線から、ここを起点に。
ココギリ……………ここだけの話に、この場かぎりの、ここだけに。
ココノタ…9つは、九の数は、この場所の田んぼは、この田。
ココグレヨカロウ……………ここだけならよいのでは、この場なら。
ココンシャイイカ……………こここの人はよいの、この家の人は。
ココジャキ……………ここですから、この場所ですから。
ココヘラ……………このへんなら、このへんの事なら。
ココントコラ……………このところ御無沙汰、最近は無沙汰で。

コサカシュ……………生意気な、意地張りな、でしゃばり性格で。
コサクンシニャ…小作の人たちには、小作してくれる人たち。
コサギマエーチ……………削りにとって、表面を美しくして。
コサグリヤ……………小さく刻んで整理、かたづけする造作。
コサニャオクルル……………追い抜かないと遅れる、追い越せ。
コサイジョケ……………削っておいたら、表面を綺麗にして。
コサンコチニャ……………追い越さないと、追い越せば勝つかも。
コサギ……………削り、削って綺麗にする、表面を美しく。
コサグン……………削って綺麗にする、表面を美しくして。
コサジー……………動作が早くて仕事も進む、動きの早い性格。

コザカシ…生意気だが動きも早い、言う代わり動くのも早い。
コシラエテン……………着飾っても、美しくしても結果が問題。
コシベント……………弁当を腰に下げて、人の腰に頼る性格人間。
コシギンチャク…人にべったり頼る性格、言うわりには鈍い。
コシャクナ……………生意気な、言う癖動きは鈍い、実行が伴わぬ。
コシュヒヤシャ…腰は冷やさないように、肝心な場所大事に。
コシュウデン……………ずる賢くでも、欲張りだが金使いは違う。
コシイノー……………欲張りだけで嫌われる、出すのは舌も惜しい。
コシキー……………欲張りの典型的な、あそこまで徹底すれば。

こ コシク……けちけちしないと、辛抱して過ごす、欲張りに。
コシンイロケ……腰回りに色気を忍ばせ、色ごとの秘密が。
コシューノシナー……疲れたのでは腰を伸ばしたら、一休み。
コシュー……腰をいたわっては、腰に無理しないように。
コシイクシ…欲張りの癖に食うときにゃ居る、出し惜しみは。
コズカレチ……叩かれて、叩かれる理由もあったのか。
コスゴタリヤ……越すようなら、溢れるようなら止めて。
コススリヤモウケ…欲張りでは抜ける面がある、欲すりゃ貧。
コズイタガ……叩いたのでは、相手の痛みが解らぬか。
コズリヤ……子ども連れなら、独身ではなかったの。

コズミヤ…小さく積み上げる、藁束を保存に積み上げる方法。
コスラニヤ…すらなければ、摩擦で傷むのでは、すり傷用心。
コスカリヤ……欲張りなら、欲張りには相手を見透かして。
コスキタ……欲張りを前面に、節約方法で対抗、心が貧しい。
コスケリヤ……欲張りなら合わせて、けちん坊ならその対抗。
コスッテン……擦れ合っても、すれ違っても、摩擦にご用心。
コズマッチ……積み上がって、余分な仕事になるのでは。
コセコセシチ……細かい性格に、落ち着きのない生活環境。
ゴゼントグチ……前座敷の戸口、昔の農家の玄関口。
コゼニヤツカエ……小さな支出を弁えて、多取りで小使う。

コゼマッチ……集まって、積み上げた残り物、仕事が残って。
コゼムリヤ……集めてみると多くなる、時時の整理が肝心。
コゼワシイ……五月蠅いような、慌ただしい。
コセニヤヨコエ…越せないなら小休止、余裕も。
コゼキク……細心の注意力、器用人、何でも屋。
コセクル……口を挟む、すぐ意見を差しはさむ。
コセコセ…常にこそこそしている、落ち着きが。
コセタニ…越せたのに、越せましたか、上出来。
コゼアツメチ……一緒に集めて、整理整頓は危害予防にも。



こ コソコソ……………うろうろして、ちょろちょろして目ざわり。
コソツト…静かに、抜き足忍び足、物静かに、油断はならぬ。
コソガキャ…動きの早い、悪坊主にゃ用心、いたずら用心。
ゴソゴソインダ……………慌てて帰った、いつの間にか帰った。
コソズル……………結構悪坊主、見かけによらぬ、油断はならぬ。
コソバイー……………刺激されて面はずかしい、触られて気持悪く。
コソウドツ…越すようだから、越すかも知れない、越すかも。
コソカン……………越すかも知れない、越すに決まっている。
コソドチ…越すようだから、すぐ越しそうだから、越す直前。
コソモンナラ……………越すとすれば、越すなら大変、越したなら。

コタエン……………持ちきれないか、待ちきれないか、我慢の限界。
ゴタゴタ……………騒動が持ち上がって、荒々しい雰囲気、騒然と。
コダカリャ……………子どもが多くなって、子たぐさんのよい家庭。
コタチヘーレ……………こたつに入ったら、こたつにお入り。
コダネンヒトマキ……………不合理な子供が、倫理に違反すれば。
コダカシイ……………結構馬力をだして、生意気な振る舞い。
コダクル…枝を切って整理する、ざつな材木をこじんまりと。
コダシン……………少しずつ小分けして、使う分だけ出して。
コタユル……………体に抵抗が、疲れが残って、リハビリ必要。
コダシンソベ……………少しずつ分けている側に、分配の側で。

コダスノキ……………小さく分ける側で、分配するそばで加勢。
コダレ……………木陰になって、木のかげで作物に被害も。
コチンコチン……………固くなって、緊張のあまり萎縮して。
ゴチョゴチョ……………ばらばらに整理したので、種々雑多。
コチカル……………こちらから、こちらの方から、手前から。
コチュー……………鋤を貸して、鋤を借りたいが、鋤を使わせて。
コチベラ……………こちら側に、こちらの方に、こちらの面に。
コチンハト……………こっちの面を、こちら側の、こちらの方向。
コツチキー……………こちらにおいで、こっちにいらっしやい。

こ コツツリハゲチ………つきかかって傷がついた、傷がはげて。
コッチペラ………こちに側の、こちらの面、こちらの方向。
ゴット………陶器製の戸車、雨戸などに使っていた。
コッチズリ………こちらに向かって、こっちに来るよう。
コッチドリ………こちにら来るよう、こちらに向かったよう。
コッチドマ………こちら側は、こちらの方向は、うちのほうは。
コッチガ………こちらが、私のほうが、手前が、こちら側が。
コツカルガ………ここからが、ここが境、ここからが正念場。
コックリガ………うたた寝が、ついうっかりして、油断して。
ゴツゴツ………動き回って、うるさく動く、用事もないのに。

コツコツ………確実に、賢明に、用心深い性格、慌てず動ぜず。
コツリオーチ………ぶつつかりあって、出会いがしらに。
ゴツソウ………ごちそうさま、湯にはいる、心くばり、接待されて。

食べ物だけではなくても 感謝のきもちの お礼に
使う場合も多い。貰い湯のばあいも『いっぱい貸し
ちょくれ』と ことわって入り 出たら『ごっそん
なりました』と 感謝の気持ちで言う。たとえ貧し
くとも 心が豊かであれば どんなに幸せか。

コテキギン………器用人で何でもこなす、何でも取り組める。
ゴテシンノ………怠け者の、のろまな性格、火急には間に合わぬ。
コデンツウ………小さな田んぼ、狭い畑、小さいことにいろいろ。
コテサキャ………手先の仕事は万能、器用なのだが。
コデリャコマル………文句が多いわりには動きが、愚痴が多い。
ゴテシンナ………怠慢な性格、口は効いても動きが鈍い。
コテサキャ………手先は器用なマ万能、繊細な手法ん持ち主。

コデマチャ………小さな田んぼは、狭い畑は、小さくても米の粉。
ゴテカル………文句が多くて手は止まっている、愚痴が多い。
コテクル………文句が一言多い、文句の割にゃ手が動かぬ。
コテコテ………調子がいいが、持ち上げ上手も、迷惑かけすぎ。

こ コトノージ……………いい按配に大事ななくて、何事もなくて。
コトコト……………静かなリズムの音、不思議な音が聞こえて。
コトンゴツ……………大げさに言い張って、そんなに言う信用が。
コトンコトン……………リズム正しい音階、何の音だろうか。
ゴトット……………不気味な音がして、大きな音に不安が。
ゴトンゴトン……………騒々しい音に、不気味な音にびっくり。
ゴトツトン……………少しの不安も聞かないが、家庭円満の証。
コドリ……………もちつきの相手役、餅つきで杵が上の時餅を回す。
コトンネーゴツ……………何事もなかったように、無事だったよう。
コドキシ……………子供の時間に、授乳の時間になったので。

コトシャヒドシ……………今年は干ばつのように、実りが不安に。
コトトシダイジャ……………話の都合では、内容によっては問題。
ゴトキ……………食事の時間で、食事についてください、食事友。
ゴトク…鉄製の生活用具で 5つの使い前があるとも言う。仮
に使えば 鍋をかけて煮る、温める、焼く、沸かす。
この他に 網をかけて焼く、沸かした蒸気で蒸す、な
どの使い勝手がよい。古くから焚き火の上に 鍋など
を使って料理、乾燥、などで人間の生活が 保たれて
きたのでは。鉄文化がもたらした 英知アイデアは
今も高度に使われている。

コトワキャ……………理屈は詳しく話して、内容説明。
コナゴナジ……………微塵に壊れて、散らばってしまい。
コナイダン……………この前の、以前話した続きは。
コナシテン……………いじめても、仲間はずれにしても。
コナサニャ……………苛めないと、いじめるといつか自分が。
コナサレチ……………苛められて今に見ておれ、我慢の辛さが。
ゴナンギナ……………難儀な目にあって気の毒、大丈夫ですか。
コナスクシ…苛める癖に痛みを知らず、人の痛みを知る勇気。
コナゴナニ…微塵に壊れて、元に戻らぬ悔しさ、全滅になる。



こ コニクラシュウ……………憎らしいが愛らしい、生意気さかり。
コニモヤランジ……………子供にもあげないで、子供の分まで。
コニコスオシイー…子供にこそ教えて、子供の躰より親が先。
コニデン……………子供にでも、子供こそ大事だから、子供が先。
コニキシー…子供に着せて、子供に似合うから。子供によい。
コニケーチャル…子供に貸してあげる、子供が持って帰った。
コニクタリー…生意気な素振りがおかしい、それも愛らしい。
コニンオヤニン…子供にも親にも、親子に別けてあげるから。
コヌスト……………出来心な泥棒、安易な盗みだが、根絶しないと。
コヌンナイイガ……………こねてもよいが、手加減が難しい。

コヌカサンゴウ……………粉糠三合あれば、婿養子の厳しさ。
コヌカアリヤ……………粉糠があったなら、貧しさが厳しい時代。
コヌルゾベ……………こねているそばに、見真似か盗み技法か。
コヌルネキ……………こねている側でじっと見て、覚えたかな。
コヌクモル……………少し暖まるような、やっと温かくなった感触。
コヌルンカ……………こねますか、何のご馳走が出来るか、技術が。
コヌケーマメル……………粉糠にまみれて、糠化粧もよく似合う。
コヌードチ……………こねようかと思って、お手際のよさを。
コネリヤ……………こねている後は、生地ができたから本番に。
コネテン……………こねていても、気に入ったような生地が。

コネシコ……………こねて仕上げる、旨くこねたら本番に。
コネマエーチ……………こねてこねて次は、練習でも難しい。
コネタナ……………こねて出来たのは、少し寝かせて次に。
コネカ……………小さな猫は、子猫はどこに行ったかな。
コネチョキヤ……………こねておけば誰でも延ばせるから。
コネクリヤ……………こね回した生地は旨くゆくかな、生地作りは。
コネノニ……………こねてすぐでは、しばらく寝かせたがよい。
コノミガアッチ……………好き嫌いがあるので、人の好みは至難。
コノミュイエ……………好みを言いなさい、好き嫌いは早めに。

こ コノマンマニ…このままに、そっとして置いて、自然にして。
コノムキ…このままに、そっとして置く、この状態で。
コノソベ…子どもの側に、この物の側に、この側に何かを。
コノモリヤヒジ…子守は苦勞する、子守は大變な仕事。
コノンジキタキ…好き勝手に来たので、希望して来たから。
コノキリュこ…の布を、この仕事の区切りをしては。
コノモウト…好むことで、好まなくても、好き嫌いは。
コバラン…少しお腹が空いたので、間食はどうか。
コバラミュ…妊娠したので、赤ちゃんに恵まれて、受胎。
コバロヤンナア…少し食べておいて、お茶受けに一口。

コバケ…憎たれ口を言う、人の嫌うことを平気で。
コバケシチ…生意気な態度の、勝手気ままな発言をする。
コバエ…動きが早い性格、早さが取り柄、すぐ間に合う。
コビリュ…休憩のお茶にして、間食で腹たしにして。
コビカリユ…小さな出し合いの食事、割り勘の楽しみ会。
コビキ…大きな鋸でわく仕事、材木の大割を鋸でする。
コビックリ…瞬間吃驚。 製材所のなかった時代には
コビッチョ…小さな体格。 足場を作って大きな 材料
コビーチ…こぼして。 を鋸で割く仕事があつて
コビッチ…削つて。 コビキサンと呼んでいた。

コビル…農家が長い時間の仕事の中間に簡単な食べ物を。
コビキャ…木割りを鋸でする人は、製材所の役目をする人。
コブダラケ…こぶが出来た表情、転んで叩かれて作った。
コブランカ…噛みついて食べる表情、大胆にこぶるつく。
コブリメ…こぶらずに上品に、歯が悪いから無理しない。
コブッチ…こぶってたべる醍醐味、独特な食感がある。
コブタンガ…こぶが出来て恥ずかしい、転んだのでみやげに。
コブカン…こぶかも、転んだ時に打つたので。
コブコブ…凸凹になった形態、不揃いな見かけの悪い。

こ コビキ…木挽のことで製材所が発達してなかった頃 大鋸で製材する人たち。材木屋に雇われて共同で働く例が多く 棟梁が世話をしていた。柱や板にわいて運び出す手法が多かったが 庭先まで運びだして わく仕事も見かけた。大きな鋸を『おか』とも呼び その鋸で挽いて出た屑を『おかくず』と 言い現在も使われている。庭先で大きな材木に乗って 挽く様は男らしさが 浮世絵のようだった。

コベベ…小さな牛の子、出来たばかりの牛の子、小さな着物。
コベリチーチ…びったりくっついて、真剣に密着して。
コベタジ…本当に下手で、お粗末な振る舞いで。
コベツ…小さな場所、ちいさな物、小さな面、小さな傷。
ゴボゴボ…水に沈む有様、水を入れると空気が浮き出す。
コボシチョル…こぼして行儀が悪い、落として始末が悪い。
コボシチ…こぼす、落としてしみ出る、落として散らばる。
コボルリャ…流れ出ると、散らばってしまうと、溢れ出る。
コボレテン…こぼれても、流れ出ても、散らばっても。
コボスナ…こぼしなさんな、散らばらさないように。

コボルルド…こぼして汚しては、散らばって迷惑では。
コボクレ…小さな木片、小さくなった断片、小さい雑多な物。
コボサニャ…こぼさないと、散らばらせないと。
コボレチ…散らして、溢れでて、周囲に迷惑を。
コマゴマシチ…精密な道具になっている、説明を読んで。
コマガクル…種馬が回ってくる、発情時期の種付け馬。
コマカキュツクロエ…垣根の修理をしないと、補修管理が。
コマランデン…困らなくても用事はあるもの、即応体制を。
コマルゴタリャ…困るようなら応援を、相身互いの互助精神。
コマワリャ…些細な繊細さが役立つ、急ぎは遠回りでも。
コマシャクレチ…小さいわりには過度成長、大人びた子。

こ コマカケ……馬が下り坂で道から飛びおりないように土手を。
コマンナ……困るのは、困って迷惑になる、迷惑かけてご免。
ゴミマミリ……ごみにまみれて、汚れてしまって、汚れが酷く。
ゴミヤ……ごみは、ごみの始末を早くしないと、ごみを始末。
ゴミゴミ……雑多に混み合って、整理整頓をしないと。
ゴミンイイナ……歌声がなかなか上手で、発生が堂に居る。
ゴミヤキュ……ごみを焼却して、不衛生は病気の元、火の用心。
コムユウツク……米つきする、精米所の爽やかなリズム。
コムユオサミ……米の入庫を、小作米の納め込み、米で納める。
コミノニ……込んだばかりなのに、やっと平穩になったのに。

コミセン……柱のつなぎ目を木の栓でつなぐ、つなぎ目の固定。
コムゴタリヤ……混むようなら、混むなら別の道路を。
ゴムジュウジ……ゴムの力で飛ばす遊び鉄砲、子供の自家製。
コムナワリー……混むようでは困る、混まない企画を。
コムンカ……混むようでは、混むのなら別の方法を。
コムゲチ……担ぎ挙げて、担いで運ぶ方法、担いで上にあげる。
ゴムリヤユウチ……無理を言って恐縮です、無理を承知で。
コムリヤ……入れてしまえば、思いが通じると思う。
コメミサテング……米味噌はお手の物、米味噌なら食い延ばす。
コメグレ……米くらいならば、米でよければ、米ならいつでも。

コメダキャ……米だけはなんとか、米なら任せて、米は手の物。
コメンデケアキ……米の取り入れが済んだ、取り入れおわった。
コメチナンボ……いっさいふくめて幾ら、全部でどうです。
コメジャキ……米だから後はなんとか、米さえあればなんとか。
コメルリヤ……込められるなら、込めたのなら、込めれば。
コメノニ……込めたばかりに、込めたまではよいが。
コモヨバニヤ……子供も呼ばないと、子供を呼ぶ勇気が。
コモリュ……子守をしてもらう、子守をしてあげよう。
コモウッチ……コモ打っておけば先が楽しみ、こまうち半作。

こ コモリヤヒジイ…子守は大変だけれど、子守には責任もある。
コモッチノヤ……煙りが充満して、湿気が家の中にたまって。
コモレタカン……落ちてしまったかも、途中から落ちたかも。
コモッチョル………煙りがたちこめている、家から出ないで。
コモッタキ……入ったままになっているので、様子を見ては。
ゴモクナラビユ……………囲碁をしている、囲碁の対局がある。
コモラレチ………入ったままになっているので、出てこない。
コモカルイ……薦を持参して作業を、薦を背負うと蠅防御に。
コモチャ……子供持ちならば、卵を抱いている虫、子供がいる。
コモッテン……こもったままになっても、効果があるのか疑問。

コヤンカゲジ…小屋ん影じなんじゃろう、若いしん楽しみか。
コヤカマシイ…五月蠅いから、静かにしないと、同じ口調ん。
コヤシュツカエ………肥やしを有効に使う、何事も使い様で。
コヤオウ……少し静かにしては、落ち着いて静かに、軟弱に。
コユマケ……肥やしを撒いて、追肥が効果をあげる、適期追肥。
コユルトン……肥えるのは考え物、肥えては美容にもよくない。
コユンナ……肥えなくても、太るのは考え物、肥えない工面を。
コユリット……………ゆっくりしていて、楽に楽しみ時間を。
コユダシャボン……肥やし出しすれば盆の区切り、区切り仕事。
コユートン………太っても苦にならない、肥えてもよいから。

コヨキータキ……肥やしが効いたようで、肥やしの効果、肥倍。
コヨコイスル………ちょこっと休む、少し休憩しては、一休み。
ゴヨウネエ……用事はないですか、用事があるなら、使いの序。
コヨセチ………ひと所に集めて、片隅に集めて整理、整理整頓。
コワヒトリジ……………子供は一人です、一人っ子ですが。
コワメシャ……………おこわですが、モチコメ入りの祝い飯。
コワリヤスンダ………小さく割る仕事は済んだ、分散する仕事。
コワキンマチボリ………隠した内緒金、内緒にしていたのに。
コン……この、この人は、この品物は、このひとたちよりも。

こ コラレンカ……来られますか、来てくれますか、来ますか。
コラルリャ……こられるなら、来てくれますか、来てくれたら。
コラエジョウネ……我慢強い性格、耐え忍ぶ心意気、頑張れる。
コラレタンカ……我慢したのか、よく耐えてくれました。
コラチャダレカ……こらとは誰に言うのですか、礼儀言葉を。
ゴラネコンワヤク……まぐれ猫の悪戯、飼い主の無い猫に用心。
コラエチ……我慢する、耐え忍ぶ、関わらないのも上等。
コリヤマァ……これはまあなんと、予想とは異なるけれど。
コリカタマツチ……頑固一徹な性格、よさはあるが変哲な。
コリュマァ……これをですか、これでいいのですか、難問で。

ゴリオシュ……強引な取引、押しの一手が思わぬ結果に。
コリュヤル……これをあげますから、これをあげましょう。
コリガトブ……凝りが快方に向かった、回復の兆しに。
コリグレ……凝りと油断は禁物、専門の治療が効果あり。
コリチョケ……殺しておけば、殺生はよく考えて、即決は問題。
コリンコリン……固まった状態に、さてどんな手法で解決。
コリュモラェ……これを頂いたら、頂戴すればいいのでは。
コルモラウ……これを頂きます、これが気にいったので。
コルカルータ……これを担ぎます、これがよいので担ぎます。
コルカンシレン……凝るかも知れない趣味、気にいった結果。

コルナァハレ……凝るのなら張ったら、凝るようなら早めの。
コルージュル……転んでいるから、転んで大丈夫。
コルゴタリャ……凝るようなら、凝りすぎたら用心を。
コルーシヨ……これを使ったら、これを利用して、これが最良。
コレカルド……これからですから、これは始まりですよ。
コレンノカ……来られないのですか、来られずに残念ですが。
コレメーガ……来られないのですか、やはり来れないですか。
コレルルナー……来られるのなら、来れるようでしたら。
コレテン……来られても、来てくれても、留守にしますが。

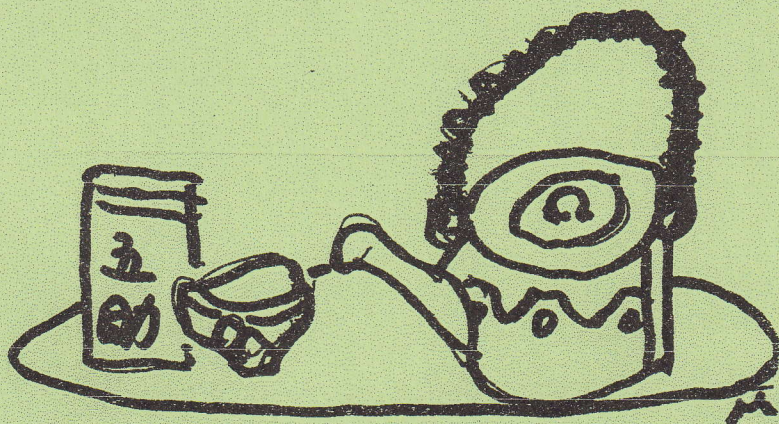
こ コレグレーカラ…このくらいからなら、こんな場合からなら。
コレミタカ…それみなさいやはり、言ったでしょうこの通り。
コレコレ…これなのですよ、このような時の為に、これです。
コレドマ………これなどは、この場合は、こんな時になって。
コロガシャ…転がしたなら、転がしてみれば、転がるように。
コロゲマワッチ……よほどおかしいのか、よほど腹痛なのか。
コロガッチ………転がって、転がるような、転がっています。
コロガリヤ…転がれば、転がるから満点、転がらないと不良。
ゴロゴロ………車のついた物が、手作りの遊び道具、車の音が。
コロガルカン………転がるかも、転がらないと、転がってこそ。

ゴロマワシ………ごろごろ音を出して動く、車を押して遊ぶ。
コロット………すっかり、うっかり、悪げげはないが、忘却。
コンダカラ………今度からは、この次からは、今後一切に。
コンメー………小さい、けちんぼう、細かな性格、辛抱家。
コンノン………この上無く、これ以上はないような、とても。
コンコン………十分に、念入りに論じて、湧水の姿、咳の音。
コンコ…………漬け物、たくあん、雪降りの状況、この子。
ゴング………それはあまりにも、とても信じられない行い。
コンクリヤ…このくらいなら、これくらいよいか、許容範囲。
コンニャカァ………こんにゃくは、裏表があっては、表裏一体。

コンダンコドマ………今度の子供は、今度は娘か男の子か。
コンクレワ………このくらいは、ここまでは、この線までは。
コンモデン………小さくとも米の粉ダンゴ、ちいさいからでは。
コンコロモチ………心持ちのよい喜び、快感、嬉しい祝杯。
コンモジ…小さくて、小さくとも役割が、不要物はない世界。
コンシャ…この人は、この人たちは、この人にはそれなりの。
コンジョソコラ…めったに人物、品物、知識人、同僚、仲間。
コンゲンネェ…この上無い、無類な、素晴らしい、心豊かな。
コン…このような、この人のように、こんな物の、無類な品。



民話 價廉



姫隠しの悲しい物語

上石合ん山の奥に姫の霊が そっと葬られちよる。源氏に敗れた平家ん落人たちが 逃げ延びここまで辿りち一たが 遂に亡くなって惜しまれた。高貴な姫であったのだろう 朱漬けにしち棺に納め埋葬。身の回りの宝物なんかも 合わせちそこに納めた。小高い山には地区の墓地があるが そんな奥まった一角に姫は 今も眠っちよるとの事。

そんな墓標にゃ文字があったじゃろうが 惜しいかな長え年月に文字も読むこたゝ難しい。さらに一段高え所にも 同じような石塔があるき もしかすりゃ姫ん墓はここかも 知れんのじゃが詳しい事は 今は謎に包まれたままになっちよる。地域ん人たちが以前にそんな 墓標ん側を木の棒じ突いち見た。

1000年も昔ん事となりゃ 果たしてどうかは決められんが 何かに当たっちコツコツと 反響ん音が伝わるような そげな気持ちになるのん まるで姫が呼びかけち 囁くような思いも伝わる。人ん魂は何年過ぎたとしても 心あるならば人には伝わるもの。ましてや大事にされている人たちに 何かお礼を、思いはゆう解る。

ここの石塔は全部が東向きに 普通は西か南に向くものじゃが 故郷を忍ぶ心くばりから そうした優しい心つかいは 無性に涙を誘うようにも感じられるが。それに風習としては盆の 掃除は7日頃にするんじゃが お参りは13日じゃのうじ 14日にするち言うんも そっと忍んで参るからじゃろう。

それに盆にゃ灯も『ともさんごつなっちよる』ち 聞くと哀れとも思えてならない。それだけ地域の人たちに 迷惑かけまいとする落人の 毅然とした心の持ち方も かいま見られるるごたる。

優しい里の人たちがいつも 気を使いながら影からそっと支え見守った 昔の物語じゃが戦乱の 時代に負ける事の厳しい宿命は ここだけじゃのうじ そんな頃はおそらく九州各地に あったんじゃないだろうか。そこじ厳しい暮らしを続けち 地域ん人たちの中に溶けこむ 試練を味わったんじゃないろう。

そのままそこじ消えてしまう人たち また一方じゃ大事にされち そこじ無事平穩なイノチキも 約束された人たち。苦勞を乗り越えて定着した人たち。思わぬ支援で今も恵まれた そげな人たちもあるんも 世の中では運もあるが 巡り合わせた人たちとの 縁もあったんじゃないろう。よく言う一期一会《イチゴイチエ》まさに 素晴らしい言葉じゃないだろうか。

それは『人間は一度きりかもしれない』が そんな一回を大事にする事が 又思わぬ場所での出会いもある』から 大事にするか粗末にしたかは その時に答えも出るもの。

★ 方言説明

朱漬け…朱に漬けておくと 腐敗しない殺菌作用で 永久にそのものが保存出来る。すりゃ…すると。なっちょる…なっている。なりゃ…なれば。そげな…そんな。られんが…られないが。ゆう…よく。じゃが…ですが。じゃのうじ…ではなくて。じゃろう…でしょう。ともさんごつ…ともさないよう。のうじ…なくて。シノチキ…生活。あったんじゃないろう…あったのでしょう。きりかん…その時だけかも。

思わぬ場所で出会う事もあるんが 人生なのです。お礼もそのけに会っても 知らぬふりする人がある。がいつかどこかで又世話にならないとも 限らないんが人生なのです。お礼や挨拶は笑顔で それが人間には得な 生き方人生と思います。

一荷和尚との力くらべ

熊本城下じ一番力自慢の さむらいが一荷和尚ん 評判ぬ聞いち
『我が領内ん野津原い そげな凄い僧侶が おるたぁ誠ち頼もしい
。いっぺん 『力くらべしちみてえもんじゃ』ち わざわざ遠い道
のりゅう 旅しち地福寺う尋ねち来た。和尚はとてん 喜くうじ
そんなさむらいを もてなしました。

そしちそんな力くらべじゃが 二人じ相談したアゲクに 『しっぺ
い』ち言うやりかたじ 勝負するこちなった。『しっぺい』ち言う
なァ ひとさし指と中指う そろえち相手ん手の甲を打ち 強かつ
た方が勝ちになるち 決まりました。こりゃー面白いどち そげな
話う聞いた近所ん 人たちが集まっち来た。

はじめに熊本んさむらいが 先に打つこちなった。なんさまこげ
な場じ 『しっぺい』をするなんか 珍しい二人だけに ちっとは
緊張しちよるごたる。窓ん外かる飛んじ来た 鉢がぐるりゅう飛ぶき
『ふんともうこげな時い』ち 気持ちが落ち着かん。見物しよる
しもちよいと 一息つく間が出来た。

和尚は机ん上に 側にあった丸石をおくと 自分の手をそんな上
におきました。『じゃご免』ち さむらいは2本の指に 息をふっか
けち 和尚ん手の甲に 力いっぱい打ちました。熊本きってん力も
ちじゃき どげなつたかな……和尚ん手は腫れ上がり 黒うなっち
しまいました。さァこんだ和尚ん番です。

さむらいは石ん上に手を 差し出しました。和尚は『じゃご免』
ち右手を振り上げち 今にも振り下ろすち 思うと何気のう和尚ん
目を 覗きくうだら なんとそこんや仏様ん 姿が見えたんです。
ハッとしち さむらいは手を引っ込めた とそんな時じゃつた 和尚
に二本指は 侍ん手の下にあった丸石を 打ちすえち8つに 割れ
ちよつた。そしち飛び散りました。

和尚はニッコリと さむらいはタマガッチシモウチ 腰を抜かしちしもうた。じゃもんじゃき 力比べを申し込んだ無礼を 詫びち決まり悪そうに コソコソと寺から 出ち行っちしもうた。和尚も丁寧に見送っち 『あゝ久しぶりに力が入った』ち 嬉しそうじゃつた。

自慢もいけんども 相手ん本当ん力が どんくれかは解らんもんじゃき 勝手に自分の力を 鷄呑みしちゃ相手に 迷惑もかけ失礼になっちしまう。ひょいとすりゃ『うぬぼれはいけないことですよ』と 無言の論しをしち くれたんかん知れない。これが『しんべい』じ よかったがもし 真剣勝負じゃつたらなえ。

一荷和尚ん逸話はいくつもあるが どん一つにも相手ん気持ちいつも 大事にしちよる。そりゃ僧侶ん立場もあるが それ以上に人間としち 守るべき心があるんじゃ なかろうか。さむらいも帰り道みちじ 反省しながら自分がん なんと幼稚な考えち 悔やんだんじゃろう。

茶店じお茶をよばれち そろそろ帰ろうち 思いよったら顔をしかめた 旅人が側に座りくうだ。『どうしたんで』『ちっと腹痛んごたっち』『そりゃ大変じゃろう 持ち合わせん薬があるきここじ 休ませてもらったら』 茶店んじいさんも 手を貸して座らせた。真っ青か顔が苦しそうじゃ。

『どこまじ行くんです』『肥後大津まで』『じゃ拙者も熊本まじ帰るき 同道してあげよう』『それは勿体ないことで』『いいこと 悪い時は甘えて また手戻しすればいいから』 茶店んじいさんが 言うも侍もそん気に なっちよるごたる。旅は道連れ世は情けんごつ 和尚に『しなさい』ち 言われるごたる。

“人ん情けが結んだ紐は 花も咲かせる実も結ぶ”馬子歌が聞こえち幸せ人生。



狸をだました五助さん

荷物を運んでん帰り道 ちっと遅くなつたが 勝手知つた道じゃ心配はねえはず。じゃがドシタンカ急に 目の前が暗くなつち 道が二つに別れちよる。『はは一狸め出たな』 落ち着いち座り込むと 腰かるたばこ入れをデータ。ソシチ 『じゃ忘れもぬした みやげはこき置いち 一走り行ちちくう』 と立ち上がちち ちっと離れた。

すると見事 バサッと音がしたち 思うたら黒い固まりが。じっと見据えち思い切り きせりんガングビじ叩いた。見事命中じ狸は 一目散に逃げちしもつた。『狸め 痛かつたじゃろう』 見送ると二つと思うた 道が一本に見えで一た。『やれやれ』 五助さんな馬ん手綱ひくと 家に急いだ。

2、3日しちかる 又こくう通ると バサッと音がするが こんだもう 『そん手は食わんど』ち 構えたもんじゃき 狸もあん痛さがまだ 残ちちよるきか 側にもよちちコンジャツタ。同じこた一ニヘンモ すりゃしめ一が いつまでん そげん事んじょうシヨルト ろくな事がねえんも 解つたごたる。

そしち又 夜に遅くなちち帰りよつたら 側に出ちくると済まんち 思うたんか側じ ウズクマルト 黙ちち山にかえちち行つたが そげな姿う見ると 『ムゲノモアル』ち 五助さんらしい話が広がちちよつた。そり一してん しら真剣叩かれた きせりんガングビゃ 相当痛かつたんじゃろう。

それかる先はショワネエンカノウ ちやっばちつた 心配にもなるごたるも 優しい五助なりゃこすん話。それかるは夜更けに通つてん あんまりワヤクされた そげん話は聞かんごたるき反省したんじゃろう。

方言単語

- 27 P そげな…そんな。おるたぁ…おるなど。みてーもんじゃ…みたいものです。とてん…とても。じゃが…ですが。どち…ことと思ひ。ぐるりゃー…周りは。ふんともう…ほんとのもう…折角の時に。ちょうと…少しの間。じゃ…それでは。
- 28 P タマガッチしもうた…びっくりしてしまふ。じゃもんじゃき…ですから。ひょいとすりゃ…もしかしたら。くれたんかん…くれたのかも。しかめた…くるしそうな顔。ごたった…ようでした。
- 29 P でん…でも。ねえはず…ないはず。じゃがドシタンカ…ですが どうしたのでしょうか。データ…だした。ソシチ…そうして。きせりんガンクビ…刻みたばこを吸う用具のきせりの『たばこを詰めて火をつける臼状の場所。しちかる…してから。こくう…ここを。コンジャツタ…来なかった。しめーか…しないでしょうか。ショルト…していると。ムゲノモアル…可愛いそうにもある。ショワネーカノウ…世話はないでしょうか。やっぱちった…やはり少しは。ごたるも…そのようにもありそうで。ワヤク…いたずら。

伝承民話として語られますが 愛敬があるのに空腹になると考えが疎かになるのも みな同じでしょう。しかし同じ手を使う浅はかさは やはり動物らしく 笑いばなしにもなります。人間世界の教えとしても 心に留め置きたいもの。豊かな心なら助けあいにも広がるのだが。動物とさげすみてはいけない人間も同じ動物の仲間なのです。ただ言葉を使え相手を労る心があるのは人間だからでしょう。





日本花世果

帰って来た宇曾の鬼

天狗と約束したに負けた 宇曾ん鬼は反省しち よそに出ち行ったが よそに行ちみると 今まじゃチットグレナラ みんなもあんまり 言わんじゃつたもんが よそじゃそげな事あとてん コラエチモ くれんもんじゃき ちっと『熱が出てん』 知らんふりしちよる。

いままじ近所んしが心配しち いろいろシチクレタンガ もうナサケノウナツタ。がそれも自分がん 身から出た錆びでんある。初めち住み慣れた 宇曾ん里が一番似合うちよる ち気がちいたもんじゃき やっぱ里心がち一た。

ある日村ん入口まじ来たが なんさま腹がへっちしもうた。そき一ござちよる お地藏さんにウマソウナ ダンゴが供えちやるんが目に入った。『たべたいのう』ち 手を出そうち思うた。と そんな時じゃつた。どこからか蜂がツージ来た。そりゅう見た里んシタチハ『ありゃ こん鬼はここじ 皆んなをコナシよつた鬼じゃな』

『悪い所う見つけた』ち 思うたもんじゃき たまがっち せんハズミ前にツンノメツタ。石段に『頭をごつん』 『あ痛えしもうた』 そんな声があんまり 大きいもんじゃき 道を通りよるしが立ち止まった。人がいっぱい集まっち来ました。『あん時ん鬼で』 『なにえなにえ』 じゃが考えちみりゃムゲノコサレ。

側に近寄ると『やっぱ七瀬ん里がいいじゃろう』ち 言われました。こげえ優しく迎えちくるる こん里が自分のおる場所ち しみじみ解ったようじゃつた。それをじっと見ちよつた 天狗も『どうやら反省しちよるな』ち 気持ちを汲み取った ようじゃつた。でもこのまま甘やかすな ゆうなかるう。いっときこんまにシチョコウ。知らぬふりしちよつた。

そんな時じゃつた どうやら火事んごたる。煙りがモクモクあがりよる。『早う加勢に行かにゃ』誰かが大声じ 唖れを聞いた鬼は 『ふんとよし 俺がはりこまにゃ こげん時お返ししゅう』ソバにあったムシロ引き寄せち 水にザブンつくと 頭に寄せち一目散に走った。火事場は近いごたる。

あっと思うまの出来事じゃつたか 早かったき大事にならんじ消えた。鬼も『役にたったごたる』ち ほっと胸なでおろした。

『こん前ん火事ん時にゃ あん帰っち来た鬼がとてん 活動したんと』 そげな噂が広がったもんじゃき 天狗も嬉しかった。『あん悪ぼうじゃつた鬼じゃろうか』『反省したんか』勝手に話すのを聞くと天狗も 『そろそろ迎えちやろうか』ち ある晩に呼び寄せた。

『皆んなも喜んじよるが 帰ったらどげ一か』『……』鬼も嬉しかった。が ここじソンナラちじゃ あんまり勝手によすぐる。『考えさせて』と いっぺんは断わったが 人んながそんな気持ちであるならばと 『心入れ変えて』と 心から反省した気持ちを示したので 里の人たちも大喜び。

里には天狗やら鬼やら 人間社会ん中じ仲よく助けあっち 住むこちなり久しぶりん 楽しい里に戻ったごたる。世の中にゃ誰一人いらんもんはない。じゃき助けあい人んために 役立つ事をそれぞれがするんが 一番いい事ですから 鬼もそんな仲間にもたへモドッタンデス。

水が出そうじゃき 加勢頼むで』『いいで俺に任せて』元氣を取り戻した鬼は 今日も早くかるハリコムき 皆から真剣頼りにされちよる ゴタル。そげな風景をみると 皆んな笑顔になっちもう。



2キロん米買い

和ちゃんが元気な声じ『ただいま』と 玄関を開けたところ奥から 咳をするのが聞こえた。『あら 誰が風邪ひいたんか』と 不思議に思うと急いで 座敷に行ってみました。そこにゃ あん元気のいい お父さんが布団から手を出して 苦しそうに寝ていました。『風邪ひいたん』『…………』

よっぽず悪いんか返事は ないけんど苦しそうです。『しよわねえき すまんが後じいいき 米屋に米買いに行っち来てくれん』『いいけんど』 心配やら吃驚やらで じっと見ていた和ちゃん。『お母さん知っよるん』『いや 知らんが大丈夫』それでん心配で 『薬飲んだの』『うんにゃ 大丈夫じゃき』

和ちゃんは服を着替えると 『どんくれ一買うの』『重たいき2キロじいいわい 炊事場に袋があるき お金はほれ』と 枕の下から 財布を出して 『これ落とさんごつしよえ』『うん解った 大丈夫な』 心配して和ちゃんが 念をおすと それによっぽず済まないと思っただんか 『お父さんは 大丈夫じゃきな車に気をつけて』『はい じゃ行ってくるき』

和ちゃんはさすがに 女の子やはり 風邪の父親が心配になりました。米買いに行く途中で 隣のばあちゃんに お父さんが風邪で 米買いに行く事も話しました。和ちゃんは小さい時から このばあちゃんは 本当のばあちゃんのように 世話をして貰っていたからでした。『なんかえ そげん事じゃつたんな』ばあちゃんも 吃驚したようじゃが すぐ気かつく人ですから さっそく 葛湯を作って持って行ってくれました。

米屋に行くと『お米2キロください』 店のおばちゃんも又『あらまゝ』 吃驚したようです。

『今日はお使いじゃな』『はい お父さん風邪ひいて』『あら
元気者が珍しいこと 早くようなりゃいいな』『うん』 みんな
心配してくれちよる お父さんな幸せ者じゃち 思うた。『はい
2キロな』『あどがとう いくらですか』『200円でいいで』
『はい 200円』 和ちゃんは財布から 出して渡しました。

『ちょつと待つてな』 おばちゃんは奥に入ると 紙包みを
持ってくる。『はい お使いのご褒美』と 和ちゃんに渡しまし
た。キョトントしましたが 受け取ると『ありがとう』と ペコ
ンと頭をさげました。お使いしただけなのに お店のおばちゃん
から ご褒美を頂く。きっとお父さんが 日頃皆さんによくして
いたからか とふと和ちゃんは思いました。

2キロは子どもにしてみれば 結構重たい荷物です。しっかり
抱えて ご褒美の中身はなんか お父さんは大丈夫か あれこれ
考えている間に家につきました。『ただいま』 奥に聞こえたの
か お父さんが『帰ったかえ ありがとう』と 言っています。
女の子に米買いさせた 父親にしてみると 気がひけるけど
母親が勤めて遅くなるき 早めの準備しないと 夕方が忙しくな
るち 思うたのでした。

5時のサイレンが鳴ると 勉強していた和ちゃんも 『お父さ
ん何かほしいもの ない』と 聞いて見た。『うん いいよ気分
も少しよくなったき』『よかった』 和ちゃんも ホットしたよ
うで おばちゃんに貰った 紙の包みを開けました となんと中
かるは 人形が可愛い目でこっち 向いちょつた。『まゝ嬉しい
お父さんこれ もらったの米屋の おばちゃんから』『え そり
ゃー和ちゃんの お利口んご褒美じゃな』

お父さんも風邪が一遍に 飛んだような気持ちになったち それも和ちゃんの『親孝行』ん おかげじ嬉しそう。

負けるはか勝

忠さんの家はほかの家より 離れた高い所にあつたき じゃあき 共同でするなんかは 皆さんに迷惑かくる事も 多ゆじ気を使いよつた。米すりの時でん 大けな機械を運ぶものじゃき 担いで上がらにゃならん。そげな時でん済んだあたあ 余分に気を使うち一杯 買ひ 楽しんで貰ひよつた。

じゃき苦勞はするし 皆んなに気は使うけんど 戦争中の疎開じゃき それも仕方なかつた。よそから来た人たちには やっぱ土地ん人ん 冷てえ目があつたき仕方ねえ 巡り合わせじゃつたんじゃろうち あきらめもシチョツタ。『はりこみよりゃ いい事もあるわい』 忠さんなそげな気持ちじ みんなとあんまり 喧嘩せんごつはしよつた。

所が近所じ 忠さんたち家族にユウシチ くるる人たちにすりゃ 見兼ねる事も多かつた。大雨が降つた日じゃつた。井路ん水をハズサンと田に水が 入りすぐると壊れちしまう。忠さんカタハ高い所じゃき 心配はねえが下ん方ん 人たちん田が心配じ 急いで井路ん水をハズスと 水を川に落とした。じゃき田がクズレンジ やつと雨もやんだ。

ところが水を落としたまま 忘れた忠さんに 『勝手に水ハズシチ俺かたん田は 干上がった』ち 文句を言い出した。確かに水が止まつたき 天気になりゃすぐ 干上がる。じゃが大雨に水止めんと 今頃は田はクズレ落ちたんじゃ なかるうか。後先なしん文句 言う気持ち 解らん事もねえが。

仕方ないき断りに 一升さげち行くと『こんだから言いなあえ』 酒瓶みた途端に 文句んモノの字もなかつた。悔し涙が出たがまあ いいか。帰ちくると子供が 心配しち『どげじゃつた』 返事を待つ目に 『しよわねえ みやげを差いで一たら もうオンの字』

秋口なっち山芋掘りに行くんか 挨拶もせんじ通るき『ハリコムナァ』ち 声だけかけたら 迷惑そうな顔しよった。無理にゃペコペコせんでんいい じゃが時の挨拶ぐれシテン 損にゃナルメーニち思うたが 『まゝいいか』 いったきした時じった。山ん方かるギウウラシイ声じ 『あいた やられた』

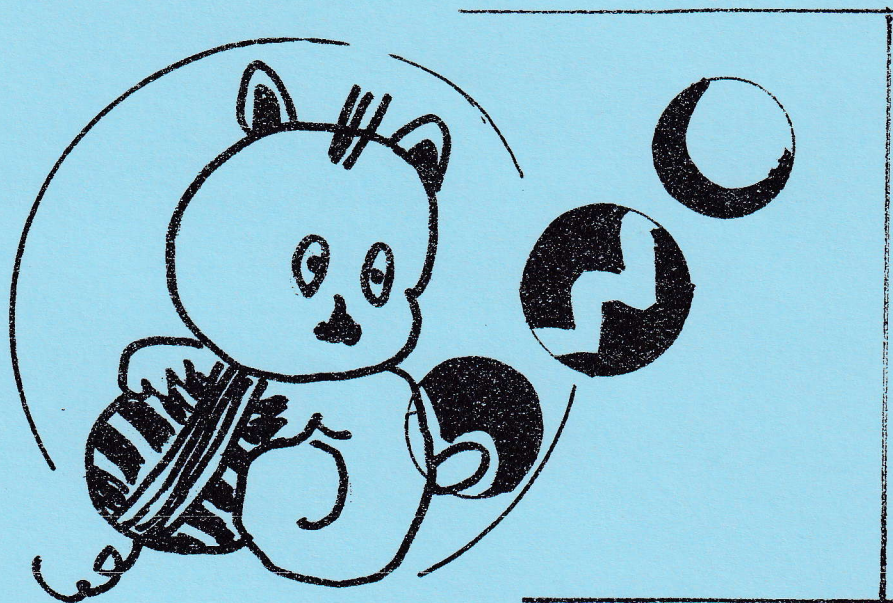
たまがったが 『さてはマヘビか それとん蜂がのう』 じつと来るまじ待ちちょつた 忠さんな『どうやら蜂じゃわい』 と家に帰ると『アモニヤ水』を 取り出しち待ちちょつた。『ちよいと済まんが蜂ヤラレタき アンモニャねえ』『そりゃ困ろうはい ここにあるで』 すぐ足んズボンぬ 引き上げち 流れるるはずニジクッちゃつた。

イットキしたら『ひりひり』が ちったユウナクタンカ 『済まんじゃつたのう』『いいえ もう大丈夫じゃろう ちよいとヨコヤイ』『…………』 テレクサカクタンカ 『おおきに』それだけ言うと きまりが悪かったんか ゴソゴソ帰っちしもうた。折角じゃに一休みしち 痛みが納まったら 帰ると楽じゃろうにまゝまゝ。

晩飯ん時にそげな話を 家族に話すと 『負けるが勝ちじゃなゝ 見たかったのう』『俺も見たかった』 日ごろ父親がいじめに合う辛さが 解るだけに子ども心に 力が入ちよる。『まゝそげ一言うもんじゃねえ あん顔はヤウチニモ見せとは なかろう。それを聞くと父親も 本当は シュワーとなったごたる。

ソレカルモあんまり 口汚のうは言わんが 人ん嫌いなこつう言うき 損な人間じゃろう。『お前どうもあんまり真似せんごつせんと』 『俺どうセンデのや兄ちゃん』『本当か』 貧しいが心まじゃ貧しくねえ家族 笑顔が夕食ん場に広がった。『痛みはなかろうか』 弟がそげ一言うたもんじゃき 兄きがゲンコツう一つコツン。

女性の底力



祭り餅のお礼

清正公祭りが賑やけち 聞いチョツタが友達とん見物が 許されたなゝはじめちん 愛ちゃんは二人じ御輿が 来るぬ待っちょつた。そんな時じゃつた太鼓が 急に激しゅ鳴りだしたち 思いよつたらすぐ側じ 『ワツショイ ワツショイ』と みんなも もう嬉しい悲鳴をあげよる。

そんなくれ一祭りは賑やかじ 見物人まじ興奮させちしまう。来たち思いよるそんな瞬間にもう 軒先前に御輿が若者に担がれち 目の前に……『あっ大変』そんな瞬間に 押しマクラレチ二人共 そんな家縁先にセリアゲラレタ。『ご免なさい』必死で それだけ言うのと靴を もう無意識に脱いだごたる。ちゃんと持っちょる。

『早っこっちにオイデ』 この家の上品なバアチャンが 両手じ奥に引き寄せち連れこんだ。『すみません』『いいんよ祭りにゃ ゆうある事 怪我なかった』 ニコニコ笑いながら『まゝまゝ可愛い娘さんじゃこと』 まだ動悸が納まらんが 御輿は遠のいたきホットは しちよつた。

『こっちにおいで お茶でもどう』『すみません』 二人は咄嗟の出来事に タマガッタ事やら機敏に処理する 手際んよさに感心シチシモウタ。『ちった落ち着いたようじゃな』『ありがとうございます います』 二人ん顔を見比べち『もうショワねえき はい祭り餅をおあがり』 と差し出された 米の粉餅がカンカラん座布団に チョコット座っちょる。なんと品のいいこと。

遠慮しているようじゃき 『遠慮せんでんいいんよ 祭りにゃ誰でんお接待するんよ』 奇策に言われて 急にお腹も空いたような按配。『頂きます』 二人はカンカラの葉をジット はがして白い輝くような餅を眺めた。『これがカンカラ餅』じゃち 顔見比べちゴクン生唾飲みこんだ。

御輿は二度目は側までは来てん もう押し上げはセンジャツタ。若い娘にしちみりゃ 若い人たちん躍動する姿に 母性本能もくすぐられたんか いつまでん脳裏に残映が 刻み残されちよるよう。紅白ん祭り提灯が幻想的に 町筋を飾った一年一度の祭り。あっと思う間に消えたけど 仄かな夢はいつまでん 心ん底に残ったごたる。

秋の深まりが肌寒さに変わった頃じゃつた。庭先をハワイちよると 木戸口じ若い娘がたっちよる。『ごめんください』 ゆう見ると思い出した おバアチャン 『アラあん時の娘さん』『はいそうです 祭りの際にはいろいろ お世話になりご馳走になり そりーお土産まじ頂いち ありがとうございます』

やはり年頃 田舎と言うてん 心得たもんじ きちんと挨拶した後に なんと秋の彩りを添える 『ツルウメモドキ』の 実がついた葛花。『まゝこれ頂けるの ありがとうございます ジイチャンが 大好きじゃつたんですよ まゝよく気がついた事』『はい写真に写っていたので』

目ざとく見たのだろう 晩年のジイチャンが ツルウメモドキを嬉しそうに持って スナップ写真。『若いと思っていたけれどやはり よく育てられていますね ありがとうございます ありがとうございます』『カンカラ餅のお返しです』『そう なによりのお土産ですよ』おバアチャンの喜びようは だけにきつとジイチャンも 喜んでいるのでは。

束の間の巡り会った 心のおもてなしだったが 若い娘の心に 人ん情愛も感化して お返しにと考えた繊細さ。人はこんな絆に支えられ 広まってゆく社会なのでしょう。若い娘の成長はこの先が『楽しみ』と 目を細めて考える心には もしかすれば花嫁姿まで 浮かんじよるんじゃはあるまいか。実話アレンジ読み語りの資料から。



豊後ん岩戸に仄かな夢

君よ知らずや我が故郷ん 七瀬ん川ん上流に 造化の神ん鑿ん
跡 豊後の岩戸ん聳ゆるを 千古の昔ん地変のたみー 自然に生
まれ出たりしか 水なしたる業なるか 見事に切り立つあん岩。
宇津尾ん川を 見下ろしち 辻原ばるを真向かいに 立てられし
豊後ん岩戸。七瀬ん川に湯あみせし こん村人も今もなお 不思議
な扉ん存在を 知る人なきど口惜しい。

かって野津原に在住した 野津原夏子が 書き残した伝承ん扉
物語りん一説。なるほど権現かる ちっと川添いを 溯って行く
うち そげな場所らしい所い 辿りち一た。そげ一言ゃ崖もあり
仄岩か それに似たような場所。まさかコゲナ所い それがある
場所ん目にする 格好ん場所でんあるう。

こん人が言うごつ 造化ん神が鑿じ 掘ったんならそりゅう
テツドウタしがおったはず。じゃにそれらしいもんな ねえ所う
みりゃ仄かな夢か。ちよいと一服しち 回りう見まえ一たら 見
事に切り立った岩があった。安蘇噴火ん溶岩が固まったんか ケ
ックシャ大きいもんじゃ。そげな岩なら鑿でん 削れるる。

さてと七瀬川がここまじ来ると 吉熊川が出会い 左に曲がっ
ちこん岩は うまい具合に避けちくれた。じゃき心配ねえけんど
そしちみりゃどこかる ここに来たんじゃろうか。吉熊にゃ浅
内かる来た道があるが 東にゃ入蔵があるき 無理いこん谷にオ
レンデンヨカロウモン。

宇津尾ん鼻先かる 見下ろした七瀬川はいい眺め。そんま向か
いに辻原ばるがゆう見ゆる。そき一立てられた扉 なんとまゝ絵
にでんなりそうな。野津原夏子さんがん話うきくかなあ。

死して地獄に落ちる時 閻魔の王の立ち賜い 三国の峠と豊後の岩戸を 見しことありやと 問い賜う。そんな時岩戸を見し人は 極楽浄土に送られて 岩戸を見ざるその人は 地獄の責め苦しむと合うと言う。いにしえよりの伝説を 今は大方聞こえ果て 自然のなしたる 神秘の技を 知る人なきぞ恨みなる。人もし七瀬を 溯り 千古の秘密を閉じこめし 秘密の扉ひらきなば 造化の神も喜ばん。

見るのも参考になり もし真実であればコリヤ 又モウケモンかん知れん。人間が死んで地獄 極楽もあるかん知れんが そりゃ未来よりゃ現世にこす あると思うが本当じゃねえ。生きちよる事じ地獄ん目にあい 極楽んごたる瞬間もあるんで。人生にゃ9つん苦勞と1つん樂が 当たり前人生そうな。

とすりゃ苦勞が当たり前 たまに樂したなァ 苦勞したご褒美じ 9割が苦勞なら 腹も立つめえじゃねえ。樂するんが当たり前ち思うなァ ちっと虫がよすぐるち思う。死んだ時に閻魔さんが調べるも 現世じいろいろ調べられ いろいろ人にも教える。そりゃ惜しんだ 教えんじゃつたが差になるごたる。

三国峠にゃ江戸時代後に 諏訪村、谷村、野津原村ん 3村が 境じ出会う場所じゃつた。峠道をここまじ来ると 一休みしち 顔見合わせたシタチガ 苦勞はなし 樂しかった喜び なんかをしゃべる事じ気分も まぎれ苦勞も消え去る。話を聞くと皆んな苦勞は 抱えもっちゃるもん。9つん苦勞を今日すりゃ 1つん 樂しみ喜びがある。ち思えば腹もたつめえ。

両方見らんでん頑張ったんなら ご褒美ん極楽もあるじゃろう きなえ。くよくよしなんな たった一度きりの人生。野津原夏子さんの話も参考に 世の中夢もロマンもあるもん。それよりサカシイんが一番幸せじゃ あるめーか健康こす幸せん原点です。



読み聞かせ力の魅力

次は何が出るのか 真剣な眼差しに 微笑みながらその心中を巧みに 捕らえる独特な技法は 長年の体験と接する 子どもん目の動きが心ん動きになっち 現れるち言う。自分自身も母親じあり 孫とん相手ん 読み聞かせん時じゃつちある。色彩がマコチ美しい紙芝居も 人気があるき取り入れたりもする。

ローテーションを組み 早朝ん15分あまりに 学校に出向くのん 家庭ん理解協力がねえと 至難の技じゃが そりゅうコンナス根性はもう 堂々たるもんじ敬服のみ。図書館ゃコンパルん貸し出しを利用する 手持ち図書が生かさるる 新刊をあさる刹那に 自分も勉強し 話芸も体得した時間 そこにゃ社会奉仕ん片隅じゃが 効果は大きい ちも言われるとコソバイ嬉しい。

チャイムに誘導さるるごつ 教室にはいると固唾を飲む 子どもたちん目は 圧倒されそうな時もある。それだけ期待もされた話題が待たれた時。先が読み取られそうな 凄い判断力に出会うと かえってタジタジとなり 嬉しくもさせられるから 不思議でんあるち ホットするごたる顔。

暑い時に座った子どもたちは まんじりともセンジ 口もとを追いながら話が 急展開する筋書きに 先を読んだような目が 追いかけてくると声のとまりそう。思い代えちひと呼吸 ふっと笑顔がこぼれたのも 『やっぱそうじゃつた』ち 狙った先がタマタマ当たると もう読書熱が増しそうに見ゆる。

『今日は方言が入っちゃるき』 怪訝な目が『私は方言でん解るが』 そう言いたげな 顔じ見上げられた。子どもでも方言に 関心があるな 嬉しいこと そりゃー故郷ん生活用語ん文化でんあるきなえ。若い人たちが使うた 楽しみち思わず……。

子どもの成長は親の成長である。親が家庭教育だけじゃのうじ 読み聞かせ、読み語りなんかを通じち 自分の成長する心は素晴らしい。家庭、社会、地域づくりにん ひろがるごたるな。あれかるもっ15年 26人がチームワークいい。共通の悩み 苦勞を抱えながら それらに向うち取り組む そんな自助努力はやんがち 実り多い花と咲くじゃろうち 想像すりゃ夢も大きい。

自身も家庭も周囲と 成長する自然体に連携し 無駄の無理のない活動として 評価されるのでは。若い時代に失敗したり 苦勞することはそれだけ 箔がついたのかも知れない。20年に届く取り組みも ご苦勞は決して無駄にゃならん 尊い香りのいい花じあり 心豊かじ有意義人生ん 謳歌ん響きじゃろう。

方言説明

39P そげ…そんな。そげな…そんな。コゲナ…こんな。はず…と思います。じゃに…なのに。テツドウタ…加勢した、もんじゃ…ものです。さてと…ところで。どこかる…どちらから。オレンデンヨカロウモン…おれなくてもよいのでは。そきー…そこに。

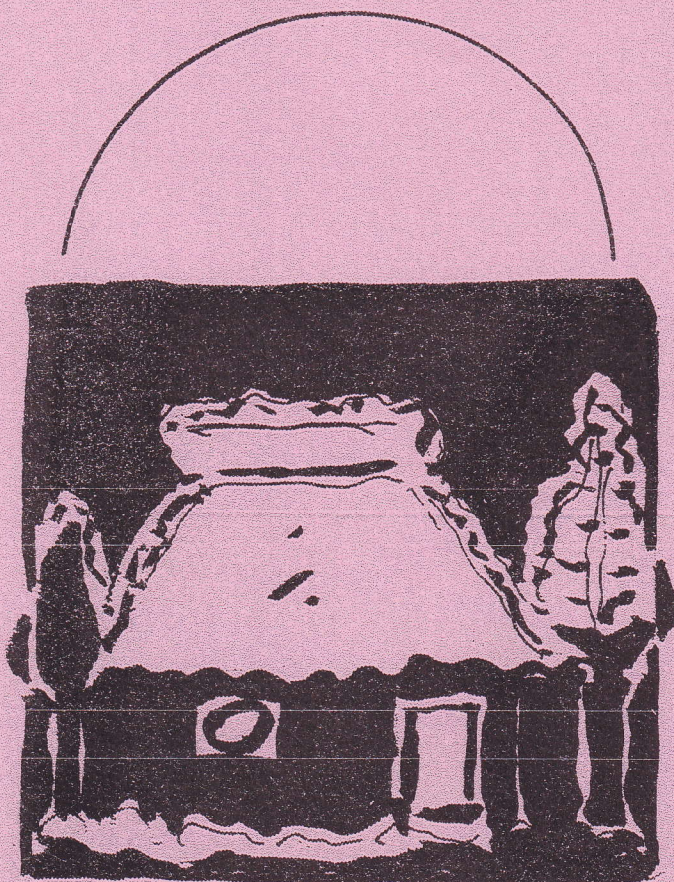
40P コリャ…これは。とすりゃ…とすれば。たまに…時折。ちっと虫が…勝手すぎない。シタチカ…人たちが。なんかお…あれこれ。サカシイ…健康で。

41P じゃつちあ…だってあります。そりゅう…それを。コナス…うまく使い分ける。コソバイ嬉しい…恥ずかしいように嬉しい。センジ…しなくて。やつば…やはり。タマタマ…偶然にも。



五助の

南
北
詰
の
外
詰



クルスを刻んだ五輪塔

前田の一角に四散して 建立されたもんを 篤志家が1ヶ所に集めち 組み合わせるごつう スタイルを整えた墓地。45塔があったがその中に クルスを刻んだもんが 8基以上はあっち 戦国末期ん犠牲者んものと 察せらるる。こん地区は昔ゆう戦火に 遭遇しよったき それも頷けるごたる。

そげな地形もあったが 定着者以外ん人たちでん 戦火を逃れち移動するナカメ こじ遂に落命する。または他国じ不幸の末に ここを修篤地にした。など戦国時代の痛ましい姿は世の東西は問われんごたる。それでん供養される 心はせめても幸せでん あったことじゃろう。

他地区でん資料にもあるごつ そげな犠牲者ん精魂は 仏門を開いて広い心で 懇ろに取り扱うような 流布もあったように 人の魂は途端に仏として 現世のひとたちが 供養する事も巡り合わせの 宿命かもしれないよう。戦火は人が人を抹殺する 哀れさが付きまとうが 現世にも止まらない 現実の世界は嘆かわしいことである。

大友全盛にはクルス愛着も 人の心には根づくもの。ましてや当時の世相では 自然の姿であったんか。とすりゃ追われて行く さ迷うなどの運命に 人が不幸になる事は 悲しい現実でもありその犠牲者を 大事にしてあげる情愛は決して 行き過ぎてはなかったのだから。

平和社会では調査によっち こげな現実ん社会が各地で 浮き彫りされているが そう考えると可笑しな事でも なさそうに見るのも時代の 背景がそうさせるんじゃろう。戦火が続いた戦国時代の 武将の悲しさはどうにも ならぬが。

ここんすぐ北ん高台にゃ 繁美城があっち一頃は 優美な城としち全盛を誇っていた。台地にゃ広場もあっち 館や賓客殿、馬場、隠し田、抜け道、などど完備されちよつた。じゃが警備警護がいいだけに そんな規律も正しかったんか 江戸期になっち肥後領地ん接收ん時にゃ あれまで整ちよつた 公園のごたる城趾にゃ それこそ墓石ん一つも なかったんと。

後じ解ったんじゃが 特別ん墓石以外は 麓ん周辺に慄然と並んじよるとか。去るものの気品の一端も 垣間見る思いがするち 話しよったそうな。まさに立つ鳥後を濁さずん 世の例えなんじゃろう。北ん台地にゃ池もあっち 生活用水も完備だけに過ごした全盛は きっと里ん人たちも 幸せじゃつたんじゃろう。

諏訪文化が根づいた地域 それらを総合するに人の交流も城があればそこに自然と 離合集散もあっち産物、人、農耕、文化、生活、と向上したに違いあるめえ。郷社格ん諏訪神社も文化を広げる 場所としてん役割も大きいし 継承する人的な後継者の 輩出はそれも如実に物語ちよる。

久住山系の末端がここに来る 北には鶴見山系が顔を出す。南にゃ阿蘇山系が 覗いた場所とん言うき それも頷ける。阿蘇噴火ん溶岩が川底う固め 一枚岩がここやら福宗川 七瀬川ん竹内まじ敷き詰めた。もんじゃき地盤が固えち言う 節も多いな『地震に強え』ち 言わるりゃ何んかにん 嬉しいが。

人を大事にしたご褒美が もしかしち残ちよるんか。そげな仄かな夢を追うのは 少し贅沢じゃがそげな 土地柄ち自負するにゃ いいんかん知れんなあ。戦火も火伏地蔵仏ん ご加護じ護られちよるんなら これからも大事にしゅうえな。それが先人にしてあげらるる 今ん人たちん仕事じゃろうなあ。



伝承民話 『義経を迎える夢も消えて』

戦国時代に苦難の道を歩いた 源義経とん関わりがあっち 仄かな夢物語りが野津原にもあった。壇の浦の源平合戦じゃ 武勲脚光を浴べた義経も悲運は ここでごん現れた。兄の軍門はこん儘じゃ 禍根を残すち 虐げらるる追放の手じゃき 九州軍団じゃ 『そげはさせん』ち 迎えの手を差し向けた。

大野軍は『岡城に迎えよう』ち 画策しち途中の愛宕城じ休息ん 手はずと準備に早急の取り組み 野津原でごん急きょ補修なんか手配をはじめたき 噂が忽ち広がっち若え娘たちにゃ 憧れん想いが 日増しに大きゅうなっちよつた。

がそれも束の間ん 露と消える悲運はここでごん 如実に現れて追っ手を辛うじて逃れた 一行は四国かる紀伊に渡っち行方をくらませたらしい。夜星朝月を明かりに 娘たちん心情は理解もでくる悲しい舞台はやんがち 切のう消えてしもうた。幸運にも義経は北陸を抜けて 陸奥に進んだち言う……………。

民話 『お地蔵さんな子どもが好き』

村ん辻にお地蔵さまが立っちよる。子どもが暇さえありゃ顔う撫でたり 頭にあがったりするモンじゃき 近所んバアサンが 大声じ怒る。じゃき子どももそんバアサンが おる時にゃオトナシュ遊ぶもんじゃき お地蔵様も心配しよつた。『あげえ言わんでんいいに』 苦笑いしよつた。

夏ん暑い盛りん頃じゃつた。あんバアサンが どしたんか熱う出しち寝こんだち 子どもたちが心配しよる。お地蔵様もソゲナ子どもん 気持ちを思うと 『早くユウナリヤイイガ』ち 見よつたら そんバアサンが『見てほしい』ち 頼み来た。お地蔵様は『あんまり子どもうセガウキ』ち 言うて聞かせた。

そして『寝ているからと 子どもたちは心配しちよる事なんかも』それを聞いたバアサンは 自分が言う過ぎたことの 大人気ないことにも気がつき お詫びして許してもらった。

帰り道で妙に気分がよくなっち 『不思議なこと』ち お地蔵様のまえまで帰ったら そこには子どもが供えたんじやろう 餅やら菓子やら子どもらしい物が 一杯供えてあった。それをじっと見ていると涙が ひとりでに流れ出て そん中に子どもたちん遊ぶ姿が 一杯ひろがった。

『やっぱ私が子どもにヤカマシュ言うな 間違っていたんじゃこらえてな』 じっと座り込むと 一心にお詫びをしようた。そりゅう見た子どもたちは 『わおバアサンか 元気になったど』、みんな嬉しそうに 集まったもんじゃきた バアサンモとても嬉しかった。

『みんなすまんじゃつたな ぉ やかましゅう言うちなえ』『いんにゃいいで これからも怒ってな』 みんなの笑顔がどんくれ嬉しかったか バアサンは大声で 笑ったり泣いたり 忙しい事。お地蔵様も『よかった よかった』ち 嬉しそうじゃつた。辻が賑やかいもんじゃき 野良帰りんシタチモ 集まって笑い顔ん勢揃いになった。

次の朝 バアサンが ダンゴを作って供えたら 子どもたちもガヤガヤ集まっち来た。『さあさあ あんたたちにゃここに あるきお地蔵様な食べなんな』『うんにゃお地蔵様のがいい』 子どもたちは やっぱ供えたのが いいんじやろう。『そうなほんな いっぺんそなえるき それをさげち食べたら』『そうする』

里んひとたちも バアサンの考えがかわったのに ほっとしたごたる村ん辻じゃつた。



方言説明

- 4 3 P もんを…ものを。ごつう…ように。あっち…あって。しよったき…していたので。そげな…そのような。たちでん…たちでも。ここじ…ここで。それでん…それでも。ことでんある…ことでもあります。すりゃー…すれば。じゃろう…でしょう。
- 4 4 P ここん…ここの。じゃが…ですが。もんじゃき…ですから。なにんかにん…とにかくいろいろあるが。
- 4 5 P ここでん…ここでも。そげはさせん…そんな勝手はさせない。なっちよつた…なっていた。やんがちをやがての。モンジャキ…ものですから。オトナシュ…静かにして。あげえ…あんなに。どしたんか…どうしたのですか。ソゲナ…そのような。ユウナリヤイガ…よくなればよいが。セガウキ…いじめる、冗談に脅す。
- 4 6 P 子どもたちを語どもたちの。こらえてな…ご免なさい許してください。なつたど…なりましたよ。どんくれ…どのくらい。シタシモ…した人たちも。さげち…さげて。

人の為じゃ出来るこたー してあげてーんは人情。ましてや目の前ん人ん痛みを見りゃ 知らぬふりは出来まい。それが人間のいい所じゃが それにゃ情愛と勇氣もいるもん。してあげてーけんど 周りんしたちが見よると 恥ずかしいとか変な憶測もあっちうっかり見過ごすのん 困った現象でんある。

こん地区じゃおそらく 戦火に逃げ延びた人たちが 喘ぎながらたどり着きそこじ 暖かなもてなしを受けたとすりゃ もう感涙ん流坪に溺れそっになっちしまう。人間の素直な行動が相手に感銘を 与えた瞬間は誰でも『地獄で仏』の 心境になるんじゃあるめえか。



方言説明

47P こたー…ことは。してあげてー…行ってあげたい。それにゃ…それには。けんど…けれども。のん…のも。こん…ここの。そこじ…そこで。すりゃ…するならば。なっち…なって。なるんじゃあるめーか…なるのではないのでしょうか。

人の為になる事は 言うは簡単でも非常に 難しい行為でんありましよう。が咄嗟に出来る人は 幸せ人生を謳歌している そんな気質があるでしょう。自分も人に受けた体験 それを返す相手が 例え受けた人でのうでん《なくても》 実践することが 相手に間接的に お返ししたことになるのです。

貧しい老僧に一碗の お接待をした娘が 困っていることを つい話してしまった。でもそれは欲張りではない ささやかな気持ちを 聞かれたから打ち明けたもの。感じ入った老僧は 念力で地理から地下水脈を 割り出して教えた話。これも優しい娘に対して 何かお返ししたい気持ちが そうさせたのだろう。

地下水脈は規定の場所を流れるもの とすれば理論がなりたち お互いが情愛のご褒美として 受けるお接待でもある。『ありがとうございました』 素直にお礼が言える優しさ 心くばりは人間の生まれた 時からの備わった本質である。が途中で心の持ちかたで 変わってもゆくもの。

幸いのに水が出るのを まとめて利用する手法は その老僧に受けたお接待と心得て 大事に使うと効果が出る。その高貴な老僧は きっと 自分の修行が実ったと さらに励み人の為に精進する。心の成長は娘の優しい言葉が 起爆剤になったのかも知れない。世の中は持ちつ持たれつの 人生双六で何がかけても 誰かが不幸になるものでしょう。

五月街道物語



縄文時代《前3000年⇒300年》やら 弥生時代《その後
前300年⇒西暦200》頃まじにゃ おばねやら川べりなん
かじ 遊牧やら定着する人たちん 営みもあつたごたる。特に古
墳時代《200⇒600年》にゃ もう今市、石合、長野、辻原
、吉熊、権現、野津原、なんかが浮上した 故郷ん夜明けが現れ
ちよるように 仄かな夢とロマンが香ちよる。

七瀬川を挟んで南は岡領 北側は、直入、肥後と時代ん流れに
逆らうことなく 従う情愛は自然が素晴らしいから 人間の心に
までそれが写しだされちよつた。表往還街道も辿る五助さんな
相変わらず飄々としち いつも旅するひとたちが 取り巻いちよ
るんもまさに 『旅は道連れ世は情け』じゃろう。

“三里坂道荷物を渡し 後ろ姿に涙ぐむ“

“あん娘としごろアネサンかぶり いつか覚えた馬子唄を“
ハ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ”ホイホイホイ。

山中に入ちくると石楠花ん 美しさがひきたつ。土を選ぶち
言うき貰ってんなかなか 馴染まんツカン花。人間とゆう似ち
よるき 貰う時あ枯れた時ん おわびゅ言うんも いいかん知れ
ん。『もうダツタンジャネエ コン先ん石合いまじ行きゃ 茶店
もあるき』『そうですか 早立ちでしたから チッタだったが』
正直に言うあたりゃ 肥後ん問屋ん若旦那だけある。

こんへんまじ天領じゃき 年貢米も集むるけんど どげ言うて
ん幕府ん出先機関じゃき 偉い役人も多かつたらしい。九州でん
だいたい 真ん中へんじゃつき 見かじめも都合よかつた。じゃ
きここにゃいろんな 生活文化も情報も集まり 生活ん手本にも
なりよつたごたる。

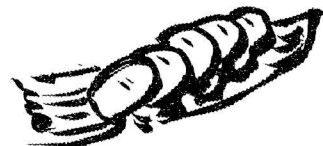
『ありゃー五助さんな 又今朝は早えなァ』『すまんえ』
『いんぎゃ すまにゃ泳ぎゃいいけんど』 まるで掛け合い漫才
が 始まったんじゃな。『こんしが今日中に 大津まじイニテー
ち言うき 若えオカチャンが待ちよると』『こりゃまァ朝か
る ご馳走さまで 丁度よかった フツ餅が出来ちよるき 土産
にいいかん知れんで』『ありがとうございます』

若旦那も嬉しかったよう こんな場所で女房ん 話に花が咲く
のも 幸せ者じゃないの。仄かに脳裏を掠めた 待ちくたびれて
いるであろう 恋女房が浮かんで来る。お茶を飲むナカメ 五助
さんな荷蔵かる 竹ん皮を引き出しち 『こりーよもぎ餅包んじ
くれなァ』

若旦那に『ここん茶店んしが あんたじゃねえ 若嫁さんに
土産にあぐると』 差し出したもんじゃき 恐縮したんか最敬礼
すると 感泣しよった。五助さんが おやじん顔じっと見ると
目じ合図した。『お前が土産にやったこち しちょきゃ祝儀があ
るじゃろうき そんな時ァ遠慮のう貰いよ』 それじもうお互いが
なえ……。

朝ん嬉しい楽しい時か流れるが 人ん心に残る感謝はいつまで
ん 心ん片隅に残っち 又こくう通る時にゃ 思い出し茶店にも
立ちよるんじゃあるめ一か。そこに人間の双六人生が 形成もさ
るるもんじゃろう。五助さんに耳打ちした 『こんままじゃ又
いつ来るか解らないので せめてお礼を』と 『心配いらんわな
じゃ あんたが心配するじゃろうなァ ちっとでん祝儀したら』

貰い物は高づくたァ昔かる言うが でんそりゃ嬉しいもんでん
あるき 若旦那も思い切り 今後のこともあるき 白紙に包むと
『ご主人』と 声に振り返ったら 『これ嬉しくて ほんのお礼
の気持ち納めてください 又いつか寄らせて頂きます』と 差し
出した。



戦中、戦後ん頃にここん 石合かるバスん運転手が 木炭バスん運転をしようた。ガソリンが不足したそん 後始末ん勤務じゃき 朝は発生炉じ起こしち 暖気じ馬力を貯めち それかる運転じゃき苦勞したごたる。けんど頑張りよったき 世話になる乗客も心得ち 上り坂は降りち歩く。そんなかめ車はヨイショヨイショち 先に走っち上り待च्चよる。

足が不自由なぼっかりい乗ったに そん上り坂じ歩くなんか思い出すと漫画んごたる。昭和31年に一の瀬橋が 台風じ傷み架け換えするこちなった。ここも仮板橋を架けち やっぱバスはボチボチ橋を渡る。戦争んおかげじもうなえ ふんと苦も見たが今サカシカリャ いい事いシチョコウエナ。

トチん木が植えられたんが 貞観5年《863》紀州熊野神社かる 創立記念に頂いた実を 持ち帰っち植えたんがそれ。県内じゃ竹田神原にある神社にもあるが 県指定ん天然記念物としちゃ 素晴らしい樹勢があっち 保存食利用もあつたごたる。名前にもあるごつ高い岩ん断崖を バックに伸びちよるトチ。高貴さも伺わせちくるる。石合ん高岩神社。

幹まわりが6.5から7Mあまり。3本は指定木じ樹高は25M前後で 1本は御神木とされちよる。秋に実つた物を乾かして晒し 粉末にすりゃ多少の苦味は あるが飢饉などの際の保存食としても かつては役立つたとか。先人の知力は生活から 滲み出た生き方の証かん知れない。

上り坂は天領管轄ん役所じゃが 広域な地域の政務にゃ苦勞も多かつたよう。じゃがそれによっち領民は 平穩に過ごせる約束もあっち 世の中が旨く保たれちよつた。神社ん石段を上り詰めた場所に、こま犬が番をするが ここじゃ唐獅子が務めちよる。長い慣習によっち配置も 任務も異なるんじゃろうが。

近時になつち通算7期も村長を務めた 堀恒夫はこの期間にゃ
議員も 2期務めた健康な人材じゃつた。地域行政ん要としち
手腕を発揮したこん間に 石合原に村ん中心地 村民の集散にも
拠点とした 役場、学校、駐在所、郵便局、なんかん公共施設を
集め 教育ん振興や生活改善 なんかも推進した。

改新会組織じゃ社会教育推進 生活改善にゃ地域起こし 植林
200ヘクタールの実践。畜産改良 しいたけ増産取り組み、な
ど多くの英知とアイデアによる 発展の起爆剤にも務めた。養命
会長じだいには 結婚媒酌などにも人間性が 買われて115組
の祝杯なども残し 叙勲も表彰も多く受賞しているよう。

石合原の歌

浮き雲流れる青い空 枯れ野原芽をふく高原の
ああ 高原の春
小さな校舎が大きく見えた あの日校舎の桜の花が
ああ 石合原 懐かしく思い出す。

茶屋場を過ぎれば 一本くぬぎ 殿様お駕籠で通った
ああ 通ったそうだ
あの道この道8年間の 小さな足跡聞こえてくるよ
ああ 石合原 通り道枯れすすき。

ふく風季節の味がする 石合原あの丘校舎の窓に
ああ 校舎の窓に
心は豊かに育ってくれた なんだか似たような友達同志
ああ 石合原 今一度帰りたい。

あれから何年過ぎたかのか ふと振り返る故郷には あの時の
あの夢 あの香り あのロマンも あの人たちと 今も甦る。

天領とは…江戸幕府の直轄地じ 江戸中期頃にゃ米ん産額じ 3千万石あったぬ 25パーセントは 天領と旗本が占めちよつた。政治、軍事、経済ん都市やら 港湾、鉱山を中心に『郡代、代官に支配させた』が 大名に委託した所もあっち 幕府ん主な財源でんあった。

参観交代…正式にゃこう書く《サンキンコウタイ》は 大名ん統制ん手段じ 1年は江戸 次ん1年は故郷に 然し妻子は江戸在住。1635年制度化されち 大名と領地ん関係を弱める。交通整備は進んだ反面にゃ 往復ん費用やら江戸ん生活費なんかに 財政難の要因にもなちよつた。

“トチん高岩朝日が照らし 日向道かる初もうで “
“朝山帰りの荷草に揺れる 可愛い山ユリ誰のやら “
“宇曾に行こうか 荒木に出よか 四辻峠の思案顔 “
ハ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ。

朝草切りに若いもんが 牛うひいち行く時あ パット夜のひき明け頃じゃが 上荷まじ乗せる分もイルリャ 8輪はいる早うセント 帰りが遅うなる。じゃがそりゃもう早えなあ 誰でんするち言うはず早えき やっぱ子どもん頃かるん手練じゃろう。夕べ出会橋じ『明日加勢しちやるき 心配せんでんいい』 そっと黒髪う撫でた湯上がりん香り。それが今夜も続くのん 皆んなが影かる支えちくるりゃこす。

“行かざるまい待たせた夜の 月も隠れた出会橋 “
ハ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ “

五助さんが竹田かる戻ちくる。石合ん茶店にゃ好きな『トロ口飯』がシコシチャッタ。『ワリト早かったなあ』『おおきに遠慮のうヨバルデ』 笑顔が広がる夕暮 なんとんいえんなあ。

方言説明

- 49P おばね…山の稜線。ちよるように…なっているように。じゃろう…でしょう。ツカン…活着しない。ダツタンジャネエ…疲れたのでしょう。コン…この。チッタ…少しは。どげー…どんなに。じゃつた…でした。じゃき…ですから。
- 50P いんにゃ…いいえ。すまにゃ…水に潜る。こんしが…この人が。イニテー…帰りたい。オカチャン…母親、女房。フツモチ…よもぎ餅。ナカメ…間に。こりー…これに。あんたじゃねえ…あなたではないですか。あぐると…差し上げます。しちおきゃ…しておけば。それじもう…その事では。こくう…ここを。あるめーか…ないでしょうか。いらんわな…しなくてもよいから。
- 51P 木炭バス…木炭の発生するガスを燃料に運転。暖気…暖めて動かす。そんなかめ…その間に。ぼっかりに…だけに。ボチボチ…ゆっくり。サカシカリャ…健康なら。シチョコウ…しておきましょう。紀州…和歌山県。じゃが…ですが。天領直轄…幕府の管理。
- 52P なんかん…などの。じだいにゃ…当時は。買われち…信頼されて。茶屋場…茶店。1本くぬぎ…元は里程木かも。8年間…戦前は高等小学校制度で尋常課が6年、高等課が2年だった。
- 53P なんか…などは。なっちょつた…なっていた。ひいち…ひいて。ひきあげ…夜明け。セント…しないと。そりゃもう…それはそれは。やつば…やはり。せんぜんいい…しなくてもよい。くるりゃこす…くださればこそ。トロロ汁…山羊を擦り下ろして調味を加え 飯にかけて食べる。シコシチョツタ…準備していた。ワリト…予想以上に。ヨバルルデ…頂きますから。

主に天領んあり方なんかが 浮き彫りされたけど やっぱ優雅さが垣間見られた ごたる思いもする。



ふるさとの味



『かんね餅…葛餅』

山ん大けな木にでん 登っちくほず元気ゆう育つ カンネンカ
ズラは山だけじゃのうじ 畑でんチット荒れどますりゃ もう時
ん間もねえ這い回っち ヒトムリャセン。杉でん松でん植えくう
じよきゃ イツンマニカ巻きち一ち ネジまげちトット フトラ
ンゴツしちしまう。

『あげなやたーネエノヤ』 『今日は根を掘っち カンネ餅い
しち食うか』 話ははえ一皆んなずれ 山に入っち太ったぬ一見
つくと 切ったりほったり 若えしがそん気じゃき 一時んな
かめフトロクサン取れた。『もうよかろうが』『やんな欲がねえ
のう』『今日はこんくれにシチョコウヤ』

山ん中 オトナシュなったち思うたら 大けなカンネを車にホ
タリ乗せち一目散に 川原にオレチ来た。浅瀬にホタリコムト
泥う落としちアラマシ 出来上がった。『ちっと皮お剥いちよか
にゃ』『じゃのう』 手回しがいいき仕事も ハカドル。『ヨシ
モウヨカロウ』『コンクレジ イインカ』

あらまし出来たき そんまま切りクザイチ 臼に入ると杵ん
出番。元気者の力仕事は時ん間に 準備も出来た。砕いたんを水
に入れちモモグルと 白い液が泥ん中に滲みでよる。『よーしイ
ットキ沈めちよかにゃ』『動きが早えもんじゃき もう出来たど
』『や こりゃ泥水じゃねえか』

『こりゃあまあ違うんど こんまめしちよきゃ 底に沈むき』
詳しい者もおるき 出来上がりが楽しいが そりゃまあ旨くいつ
た時ん話。おもしろ半分の者もおりゃ シラシンケンん者もオッ
チ 賑やけ一ことんナンチ。イットキシヨッタラ 泥水がちっと
澄みきったち思うたら 下ん方に微かに白い色が。

『見よ 出来よるどシメシメ』 話しゃ早えきもう出来たち思
う 気早えのんおるが そげは問屋が卸さんもんじゃ。『どう見
せち見よ』『出来たじゃろう』『うん こりゃー調子がいいど
じゃがまゝ何べんもくり返さんと』『何べんすりゃいいんな』『
じゃの 10回ぐれかの』『え 10回もえ こりゃ大事』

もうかるあご出しゃ困るど これかるが正念場じゃのに。ウワ
ズミュー洗いだすと水う 入れちまだ混ぜた。じゃけんど何回か
しよるうちー ゆうしたもんじ 上澄みんゴミヤラ 泥水はだん
だんノーナッチ ヤンガチシヨルト 美しい白い粘土が残った。
『ま いっぺんやろうや そすりゃもう よかろうき』『そうな
ふんな もいっぺん』 元気な声に変わった。

やんがち 水上澄みも美しい 底ん粘土にも汚いもんはねえ。
よし 『ほんな手フルイじコシチ 水ハエタラ出来上がり』 と
なった。『本当はこんまま干すんじゃが きょうは餅にするかの
う』 それがいいで 食うち見らにゃ 話しならんき』『それも
そうじゃのう』

始めちにしっちゃ 上手に出来たごたると 今日は干しちょらん
き こんまま小麦粉を混ぜち 餅コネシチ ちよいと寝せちょこ
う。『なにえ まゝ寝すんの』『そうど お前どうかる 起こさ
れたき寝むて一ち 言われたき』『またトッポ言う』『トッパじ
やねえど』 賑やかな事い広がっち行く。

いっときしち餅にちぎっち 蒸すと蒸気ん中え独特ん香り。ま
さにカンネ餅ん出来上がり。真白い餅ん肌 ギチギチする歯ざわ
り。あん荒々しいカンネカズラた 思われんごたる色ん美しさ。
『悪坊でん使用じゃこげな 美しい表情ん餅にもなる。世の中
も人間も そげな仕組みにの。みんなん笑顔がこぼれた。



方言説明

5 5 P でん…でも。ちくほず…行くほど。カンネンカズラ…葛の原木の姿勢。だけじゃのうじ…だけではなくて。チツト…少し。どますれば…そのようにするならば。ヒトムリャセン…迷惑でこまってしまう。しちょきゃ…植えておけば。イツンナカメーカ…いつの間にか。トット…まるで。フトランゴツ…成長しなくなって。あげなやた…ほんとうに迷惑で。ネーノヤ…他には例がないような。

フトロクサン…たくさんなことに。もうよかろうか…もうよいのでは。やんな…お前は。こんくれに…このくらいに。シチョコウヤ…しておきましょう。オトナシュー…静かに。オレチ…下がって。ホタリコムト…投げこんで。アラマシ…雑にしながら。じゃのう…ですね。

手まわしがいい…人数が多く流れ作業で。ハカドル…能率があがる。モウヨカロウ…大丈夫でしょう。ソクレジインカ…それだけでよいですか。くざいち…砕く。臼と杵…砕いて臼に入れ杵でついて壊す。モモグル…手で当たりまわして解く。イツトキ…少しの間。ちよかにゃ…しておかねば。もんじゃき…ものですから。じゃねえか…ではないですか。こりゃまゝ…これはまゝ。そんまめしちょけ…そのままにしておく。シラシンケン…一生懸命。オツチ…おって。ナンチ…などと。シヨッタラ…していたら。

5 6 P シメシメ…旨くいった。そげまじ…そんなにまで。もんじゃ…ものです。見せち見よ…見せなさい。じゃがまゝ…でもまゝ。ぐれか…くらいか。もうかる…今から。ウワズミュ…浮いた分の水を。しよるうち…している間に。

56 P ゆうしたもんじ…よくしたもので。ゴミやら…汚いもの
やら。ノーナッチ…なくなって。ヤンガチほやがて。シ
ヨルト…していると。やろうや…続けましょう。そす
りゃ…そうすれば。そうな…そうですか。やんがち…や
がて。ほんな…それならば。手フルルイジ…手の振動で
選別する道具。コシチ…選別して。水はえたら…水を出
してしまったら。そけれがいいで…それがよいですよ。
ならんき…ならないから。そうど…そうですよ。トッポ
…愉快的な多少色の冗談。トッパ…冗談ジョーク。ギチギ
チ…ねばねば もちもちシテ。ワルボウ…悪遊びの子ども
たち。使い用じゃ…利用の仕方によっては。そげな…
そんな。

サトガラん料理 《イタドリ》

春先に野山に自生する サトガラは酸味が強いけど それ
も旨く使うと歯ざわりんいい 山菜ん逸品料理に変身する。取
りだちにすぐ皮を剥いち 適当な長さに折 切手もよいが水に
曝すがいい。アクヌキする事じ 上品な味になる。水から出し
たら水気をきって ゆう拭いち油炒め。

味は好みによっち 甘辛、珍味を入れる、ゴボーと共煮、ニ
ンジン ピーマン なんかと炒めると 色彩が鮮やかになるき
食欲もそそる。香辛料も好みじ 使い分くりゃ言わんと そ
ん食材がなんじゃろうか。まさかんまさか…子どもが学校帰
りん 空腹ん腹ん虫押さえに 食うたおさな子時代が ヒョカッ
ト甦る。◎方言説明 取りだち…取ってすぐ。アクヌキ…あく
と酸味を飛ばすのかコツ。ユウ…よく。甘辛…甘さや辛さん調
子をする事じ 独特な味に仕上がる いわばわが家の逸品料理
かも。なんじゃろうか…なのでしょうか。ヒョカット…急に。



イリコ飯の接待

正月休みを利用しち 子ども会ん有志が自転車じ お祝訪問
ぬスルコチナック。乗り慣れた5人が『今日は天気もいい』ち
颯爽と寺町かる砂利道が まゝ多い昭和23年じゃつた。木の上
まじゃまゝ人通りも少ねえが 米すりゅうする農家が あっちこ
つちあっち発動機ん ガソリンの煙りが流れよる。

大道トンネルう押しあげち チット汗が出たが ラムネん差し
入れに一休みしち 馬車引きがここまじ帰ると なしか決まっち
馬が止まりよった。『なしかえ』 そんはずじゃ 荷も卸したき
チョコロ一杯やると 馬車にごろり乗っち いつんなかめーか
朝が早えのとダッタんもあっち うとうと眠り。

『さゝ出発』一斉にくだと 大分市ん町中に入るが 途中に
汽車ん踏切りがある。黒え煙りがモクモクあげち 貨物列車が
入っち来たごたる。遮断機がおれたき こじ汽車ん見物する。
めってみられん汽車は ふんと大けな図体じゃのう。えーと通り
すげたら遮断機が上がった。

『大分駅に寄るきそんまま右に曲がって』 石炭の燃えた匂い
が鼻に入ちくる。弁当屋ん前はご馳走ん匂いも。駅ん窓口じス
タンプ押ししてもらうと こんだ新聞社に進んだ。電車通りに出る
と石が敷いちあっち ゴトゴト自転車がパンクせにゃいいがち。
門松くぐっち新聞社に こんだんスタンプ押しでもろうた。新聞
のインキン匂いがするき 立ち止まったら『珍しいこつーするな
ゝ』ち 褒められたが 新聞記者じゃなかった。

『こんだどこな』『こんだ放送局ど』 竹町を抜けち西大分ま
じ遠いなゝ じゃが所ところが舗装されちよる。やっぱ町じゃの
う。浜の市に参っち放送局に。アンテナが高いもんじゃき見れと
よったらオラビヨル。

『お宮に参るしが多いき 片寄って通るごつ』『はい』タマガ
ッタ 何か叱られるかち思うが そりゃなかった。スタンプ押し
よったら 『あんたどうぞ苦労さま』ち キヤラメルを1つずつ
いただいた。『あーよかった』 本当はなにかもっとと 思うた
んじゃが。『まだまだ修行が足らんのう』 みんな大笑い。

帰り道はなしか皆んなユックリなった。無事すんだのんある
じゃが楽しい企画じゃつた 達成ん喜びと天気がよかったんも
嬉しい正月ん行事でんあった。『来年もしゅうえ』『じゃのう
天気がよかりゃ』 体験した今年は なにか一つでん変わった
もんじに さらに挑戦してーもんじゃが。

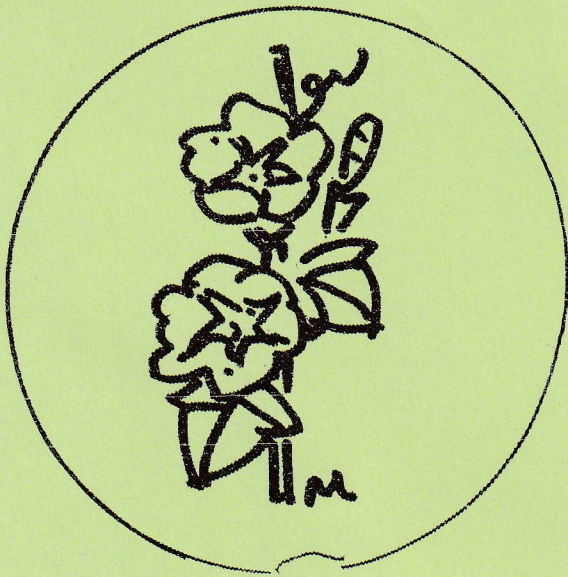
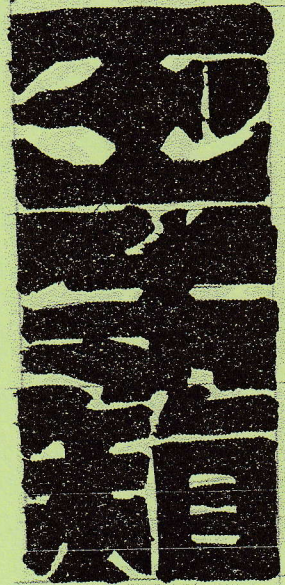
3時間ぐれーじゃつたん 無事に全員が帰りち一た。迎えち
くれた 忠ちゃんかたん おぼんが『ひずかったのう 怪我せ
んじゃつたかえ ご飯炊いてあるき食べよ』『おおきに』笑顔
が爆発した。なんと『イリコ飯』『うわぁうまそう』『うめー
で よきー炊いちゃるきガイト食べなぁ。

あん時ん『いりこめし』ん旨さ 生涯忘れられんごたつた。

方言説明…スルコチ…催し。なしか…なでか。はずじゃ…そ
んな習慣に。ダッタ…疲れた。ごたる…ようで。ふんと…ほん
とに。石が敷いち…車が線路敷に入るときけんなので敷石を。
ゴトゴト…反動で。こつー…事を。オラビヨル…呼んでいる。
ひずかったのう…疲れたでしょう。

イリコメシ…シンプル料理で小型のイリコを 炊く準備した
釜に入れて好みにより しょうゆ味の水の9 “1割くらいに。
焦げ飯がつくと最高。熱い時に食しますが 冷えても焼く事
でかばしい乙な味に。イリコの味がひろがる 素朴な珍料理。で
即席な副食なしでもOKです。カルシウムも取れる。





直入文化が香る丹生山

丹生山善生寺のあった丹生山は 府内ん丹生や荷小野《丹生野じゃなかるうか》と 同じごつ朱があっち 女性ん身嗜みに粧うたんじゃなかるうか。そりゅう練った事かる 練ヶ迫ち誰言うとのう 名付けられたんじゃなかるうか 周りにゃ栗林、柿の木、鍋なんか暮らしにも連なる呼び名が 今も残っちょる。それが当時ん暮らしを 思い起こさせちもくるる。

畑所じそれも広い畑が多かった 穀類ん粟、大豆、何かが植えられたことやら 里芋を取り入れたんも 食生活が当時としちかなり高いごたるのが 伺えちそこにゃ直入文化が入り 後にゃ大野文化 周りん天領文化や肥後文化まじ うまい調子に取り入れた 生きかたん素晴らしさが ふっと浮かんじ来る。

そん反面にゃ非作に備えた イビラ餅 竹の実さえ食ぶる方法まじ 工面した生き方が互いに 受け継がれちよつたらしい。『子どもにゃ勉強させんでんいい』ち 古老が言うのを聞くと 勉強しち偉くなると外に出ちしまう。『じゃき人材がのうなる』 なるほどそりゃ理屈になるが 真意はそれによる『自力をつくる』 励ましん苦言じゃつたらしい。そげな如実ん例も多いごたる。

盆踊りに直入地区んしが来る こっちかるも出かけち仲間入り。そんな時にゃ特別に買うちよつた 麻裏草履を履かせち 送り出す心意気は苦勞する人たちん 優雅さが滲みでてんおる。心ん豊かさは百姓じあってん 高貴な人間らしさを いつも心ん奥に忍ばせた 地域性が今も見え隠れする。

元和時代ん墓標ん墓地があるんも 『地火ん頃ん種まきでん八せん入りに間にあう』ち 言うごつ植え付けが遅れてん 諦めんじ植えちよきゃ ちゃんと実ちくるる 作物に感謝する意味んよう。

水にゃ不自由もしよったが 古老たちは決して手の内にゃ ひもじさは見せんき『すまんえ』ち 遠方まじ行く井路が通る。水たぁチッタポツタリ しみでたりはするもん。そん水が広がち下下に潜り落つる。水もちん いい田んぼにゃ チットん水でん賄うちくるるもん。

戦争が済んじ平和になっち 戦中に苦勞した高齢者に ちっとでん長きしちもらおうえち 30年ぶりん盆踊りゅ 若いしたちが復活したら 思わんご褒美ち喜ぶ。昔とった杵づかちコシラエち 踊りん輪に入った年寄りも 『長生きしちよかった』ち そげな企画に涙ぐむ。

米がコウダイジャキ 大豆を売りに行くと 錢とりにも役立つ夜なべに拵える。畑が多いんが思わん役立つ。気構えん違いが錢だけが 世の中じゃねえ気持ちん 持ちかたに変わっち 林業んグループやら シイタケんグループも 競争じ働き技法も磨いた。年寄りが頑張った地域造に 若い人たちも受け継いだ 仕事ん取り組みは今も 成果が実ちおるよう。

片田舎じあってん心は豊かな 理想郷ん住人じゃき 常に新しい息吹きを吹かせて 輝く生活環境に感謝する そげな気持ちはこれからも きっと新風を取入れた故郷の継承に 努力するのでは。芹川ダムに隣接した 静かなたたずまいの 奥座敷にゃ今日も小鳥がさえずり 可愛い花がいじらしく。

方言説明 そりゅう…それを。ごたるのか…ようなんが。じゃき…ですから。おる…います。ちょきゃ…おけば。ひもじさ…空腹な感じ。チッタポツタリ…少しは漏れたり。コウダイジャキ…大事な収入源だから。水もちん…少しの水でも長く使えるような田。元和時代…1600年代の頃の墓標を 見るとそれまでに既に生活がされていたのだろう。



報恩納経に捧げる喜び

平成11年から巡り会わせた 四国遍路の巡礼参加に 分割の
札所巡りに始まり 一斉には至難じゃった 満願の夢は個人差は
アッテン 5年あまりん中じ 全員が満願と高野山礼拝まじ と
にかく終わっち 今年は何国巡拝創設1200年の 想いでん多
い年じゃったき 誰からトンノウ 今日サカシインワ お参り
したお影でなえになった。

春ん彼岸頃にミツクウチ 巡拝記念に作った『掛け軸』を 持
ちよっち皆んなじ般若心経を唱え とにかく元気じここまじ来た
ソリー感謝しち 89巻ぬ唱える。『あんたどげする』『いい
でカテチオクル』『アンシニモ 声かきゅうなえ』『そうで声う
カクリャ ミンナイイチュウガエ』

『世話はあるたシチクルル』『イイデータキ させちもらうが
あん時ん 運転手さんが今 こっち住んじよるき よぼうえ』
『そりゃまた いいじゃねえな つもる話もあるし 失敗談もア
ルカン』『そりゃーもう ウットーガ一番じゃろうな』『朝がニ
ガテじ 迷惑かけたなえ』

『そんなかわり オスーマジ 面倒みちくれたこと』『ちょこつ
とじゃけんどな』 それぞれん思い出が マルジ走馬灯んごつ
浮かんじゃ 消えよる。『あん頃ゃ 若かったなえ 一晩ぐれは
寝らんでん 歩いたもんじゃが 心経がナカナカ 覚えんじエー
ト覚えたら もう高野山じゃつなゃ』

足がチツタ 痛うなったんが こん頃はまた巡っち 見たいご
たる想いが なんか四国にむいちよる。『運転手さんも ガイド
さんも 上手じゃつたなゃ ゆう面倒みちくれたなゃ』

『そりー10回んうち 3回も巡り会うなんか めってねえき
よくよくん 巡り合わせち よろこんでくれよったなえ』『あん
まり丈夫じゃねえき お世話を させちもらう事じ 健康になり
たいち そりゃまゝ熱心に 世話しちくれたな』『今でんガイド
しようか 会いてえもんじゃなゝ』

話によると そんガイドさんも あれかるは 元気になっち
今は退職したが 会社も人気者じゃつたき 臨時に雇用しちや
ガイドやら 添乗員なんかに 起用しよるらしい。じゃろう話法
も巧みじゃし 愛想がいいに 世話がゆうできたもんじゃ。よる
と話がひろがり 集まる日取りなんかも 進みで一た。

世話になり今も 健康じ暮らせるんは ご加護と感謝し 集い
報恩の納経をするんも 人間の正しい生き方 それが家庭の円満
無病息災にもつらなるち 声がかかった皆んなも 春ん彼岸を
タグリヨスルゴタル。そん運転手さんに 久しぶりに おうたき
これこれシカジカ』と 話したらもう 真剣喜くうじくれた。

あれかる15年余り 知らぬフリデン イキチョラルルが 心
に感謝ん想いがありゃ こげな集まりん 話は当然あっちシカル
ベキ 人間の素直な気持ちじゃろう。『ガイドさんもナエ』『ふ
んと そげーなりゃもう 大変と大事が 盆と正月んごつ 来る
んじゃなかるうか。

報恩感謝ん納経は 彼岸の期間に決まった。それに3回も巡り
あっち 世話しちくれた 機転の効くドライバー 高速が通行止
めで 急きょ一般道にくだり 近道脇道を経由 さっと高速に乗
る早業は 巡拝者はあまり気づかんが 回想記録に綴られた あ
ん遍路物語にゃ 優しい人たちん 心情が仄かに残され 四国道
にそっと 花を咲かせちよるよう。

★★★ 春の季節…まわり駒 ★★★

春先になると種駒《馬》が 集落にまわっち来る。馬が発情する機会をつかまエチ 種付けするもんじ 大けな姿体ん馬が 向こうん坂道う下りよると それが解るんか イナナク。種付け場に引いち行くことも おいいが 田舎ゃ出向いち くるるんが多い。女馬を繋いじ種馬が かかるごつなると 手助けしちかくる 場面どまコンメ子どもどま 抱いた母親でん 子どもう締めつくるぐれに興奮するち言う。顔うたちあげち笑い 上にまたがっち タテガミうクワユルト 大きな動作にゃ もうユツサユツサする ぐれになるき 興奮するんも無理あねえ。駒主しゃもう 全て手伝いするき そげな場面も春先ん 風物詩じゃなあ。

柿の坂にゃ道が通っち そんな頃ん野津原じゃ 多かった馬車が こくうヒッキリナシンごつ 通りよったが道が できたんが明治ん中期ごろ 昭和50年の舗装なるまじゃ 馬車を引く馬が 馬車ん重みじ飛びよった。そりゅう予防に作ったんが 駒掛け《駒除け》じ 石と漆喰じ固めた 高さが1.5米、幅が1米ぐれじゃが 馬もそれじデブン 被害かる助かった。が馬車とん間に 挟まれた人間が ゆうありよった。

大雨ん後どま滑りやすい モンジャキ 重荷ん時にゃ ブレーキ掛けてん滑るもんじやき 馬車ごと駒掛けに 擦りつけち えーと止まるありさまじゃつた。時にゃ輪がくいこみ 馬車やら馬やら一緒に下ん縁に飛びくうだ そげな事もあつたごたる。それじゃき北べらん丘に 馬頭観音様を祀った。それかるは事故も ウント少のうなつた。盆の17日にゃ 馬車引くしやら 関係んひとたちが お祭りとお接待しち 無事故ん祈願なんかするごつ。子ども会が踊りなんか着かざっち。世の中も発展やら つれなう事故やらが交差するけんど 人の真心はやっぱ 通ずるも世の中んごたる。

ツカマエチ…しっかりと捕らえて。するもんじ…するものです。下りよると…下ってきますと。るんか…るのでしょうか。イナナク…馬の泣き声 鼻を膨らませ気味にして。おいしいが…多いのですが。くるるんが…くれますので。かかるごつなると…性交するようになれば。どま…などは。つくるぐれに…つけるようにも。クワユルト…クワエルと。ユッサユッサ…振動するような。ぐれに…くらいに。そげな…そんな。じゃなゝ…ように見られます。

ヒッキリナシに…トメドモなく。よった…いました。できたてん…できてまもない。昭和50年…1975年。そりゅう…それを。じゃが…ですが。デブン…だいぶ。とん…との。ゆう…よく。ありよった…ありました。

モンジャキ…ものですから。もんじゃき…ものですから。えーと…やっど。じゃつた…でした。くいこみ…はまりこんで。やら…など。くうだ…とびこんだ。そげな…そんな。ごたる…ようです。それじゃき…それですから。べらん…ほうの。かるは…からは。ウント…とても。少なうなつた…少なくなりました。しやらヒトタチ。スルゴツ…するように。つれなう…連れだって。やらが…などが。けんど…けれど。やっぱ…やはり。ごたる…ようです。

※ 皆さんも読むのに ダタンジャアルメーカ《疲れたのではなんでしょうか》 チョコット《すこし》 おもしろい話しゅ《はなしを》 シユウカマエ《しましようかなゝ》 貰い湯に行った時に『いっぱいヨンジョくれ』ち 言うんで…お風呂ひとつ貸してください。帰りには『おごっそんになりました』と お礼…ありがとうございました。暖かい方言です。



わが国も敗戦を迎えち今まじ 体験もしたことねえ混乱にな
ったがやっぱまゝ島国じゃつたきか まゝまあん纏まりが出来ち
時は 流れよったち思うが それぞれん厳しい生活環境は 格差
もあつたごたる。農家は食べ物にゃなんとか でん家におるなゝ
年寄り女、子ども。これかるが大事でんあつた。

そげな世相をチット追いかけち 『あん日あん頃』う 辿っち
見るんもいいんじゃなからうか。苦勞した過去はそれとしち 常
に人ん情けやら支えやらが あつたきこす今があるんか 知れん
ち思うと感謝せにゃなるめえなゝ。病氣じ伏せちよつたし 食
ぶるもんものうじ 代用食だけじ過ごした人も。

昭和20年…1945年終戦じ マツカーサー元帥が厚木到着
が30日。戦後はじめちん大相撲は11月16日開催になった。
もうそんな頃にゃ『リンゴの歌』『かえり船』『東京の花売り娘』
ん レコードが発売された。真空管ラジオが売れち 下取りした
のでん安く買えた時代じゃつた。

早いしゃこん後にすぐ 帰つた引き上げ者 そしち復員軍人も
あっち 今まじ若いしは珍しかったに どころここん若者がもう
いっばいじ やっぱ活気もあつたが そんな影じ戦死した英霊も
無言の帰還の痛ましい光景も。厳しかった供出はまだまだ 更に
命令があっち割り当て消化が 出来んと代用ん麦、トイモもよ
かつたごたるが これまた頼って来る農家じゃ そんなサンクリに
苦勞も続きよつた。

配給制度ど続いち酒なんか なかなか手に入らんもんじゃき
鬮酒、鬮焼酎も横行しち『かつぎ屋』さんが 走り回り一定の時
間にそきい 行くと物物交換じ米がよそに行く。取締りが厳しい
バスに乗り継ぎ来たに 統制にかかると没収されよつた。生活ん
為とは言え皆んなが 苦勞した戦後じゃつた。

そんな頃ん県のほうわどげじゃったか 大分交通が発足、県知事の細田徳寿さんが赴任。県の人口は1124513人。外食券制度実施、ポツタム宣言受託。この間に皇居も空襲に見舞われた。

21年…たけのこ生活の言葉ん通り 一枚はいでは食う生活。栄養失調、反対にヤミ成金続出、かつぎ屋繁盛。婦人警官、婦人民生委員制度誕生。吉原廃止に預金封鎖で新円に切り替え。天皇が人間宣言、ビキニでは原爆実験。フィリッピンが独立。たばこの『ピース』を日曜祭日のみ 販売⇨一人ひと箱10本入り7円。長谷川町子の『サザエさん』が 夕刊フクニチに連載開始。

のど自慢素人音楽会、街灯録音、尋ね人、などのラジオ放送も開始。金融緊急措置令交付、預貯金の封鎖、新円切り替え実施。東京6大学野球、全国中学校優勝野球大会復活、第1回国体開催。

東宝が第1回ニューフェイス募集で 三船敏郎や久我美子などを採用。当時の封切り映画は…はたちの青春、わが青春に悔いなし、大曾根家の朝、七つの顔、などがあつた。

流行歌 歌謡曲の発売は 旅役者の歌、悲しき竹笛、夢見る扇、里の秋、などが出回って来たもの ラジオからの歌が刺激する曲は 爆発的に売れる傾向が。ラジオも『お好み音楽会』と毎日定時に放送するんじ 広がりやはやかたごたる。

世相は厳しい現実の世界でん 若者が溢るるごたる集落にゃ物はのうでん活気が 後押しするごつ勢いついち 心が豊かになつたごたる 印象は刻まれよりよつたごたる。引き上げ者、復員者はこれかる5年間くらいは 続いち一氣ににぎわいを 迎えちくれたんは嬉しい事。そん影じゃ苦勞なさつた 地区ん役員さんたちん 苦勞は舌筆には尽くきれん お疲れ様でした。



思いだしてんセツナギー 悲しい思い出もあるじゃろう でん
こりゃもうドウニンナラン宿命。今がサカシカリャ いいにしち
ハリコミヨルト 又いいこともあるんじゃねえ。そんな頃ん米ん値
じやが公定価格じ 20年《鈴木内閣》が60円。21年になる
と吉田内閣かる片山内閣になっち 値段も220円になった。

22年…芦田内閣になっち700円。始めち知事公選になっち
細田知事当選、県の農地開放2万ヘクタール達成。空飛ぶ円盤が
現れ 金属回収じ広瀬中佐などん 銅像も撤去、わが国初の女性
野球じ野外集団見合い開催。い

巷じゃ悪性インフレ、百万円宝くじ登場、ショートスカートが
流行、共同募金始まり、地方議員に婦人も進出、隣組廃止。63
制の新学制発足。当用漢字、現在かな使いによる国定教科書
使用開始。教育基本法学校教育法公布。6334制男女共学に。

菊田一夫作『鐘の鳴る丘』放送開始、人気番組に。古橋広之進
400M自由型で世界新。以後2年間に23回の新記録。キャス
リーン台風、関東地方に死者2247人の大水害をもたらした。
第1回共同募金募金総額6億円。赤い羽運動も始まる。NHKの

映画の世界は 安城家の舞踏会、今ひとたび、戦争と平和など
の封切り。歌の世界では 胸の振り子、東京ブギウギ、誰か夢な
き、あらホントかしら、雨のオランダ坂、トンガリ帽子、三日月
娘、なげきのピエロ、港が見える丘、などが発売して人気ひろ
まったごたる。

戦後2年目になっち 引き上げ復員なんかんしが 増えたも
んじゃき 景気もちっとずつゆうなったが 就職は厳しかった。

この年にゃ寺町に『子供会』がうぶ声あげた。その前に入倉にゃ『宇曾子供会』もあっち 戦乱から生き伸びた子供は そりゃもう元気印じゃった。手足しゅ汚してんどこまじでん 遊び歩いち子供が多いき 一人ぐれオランダン 親も気がつかん 間えよそじ ヨバレチ帰っちくる子もおったもんじゃ。もんじ隣近所がもうイケウチト いつしょじゃった。

23年…帝国銀行じ毒殺事件発生、大分大学設置、九州地方じ豪雨50年来の被害。朝倉文夫が文化勲章受賞。ストライキ続出リーゼントスタイル流行、警視庁に白バイ復活、110番誕生。公営競輪はじまる、

第1回NHKのだ自慢全国コンクール 神田共立講堂で実施。美空ひばりが《11》横浜国際劇場で 美空和枝の名前でデビュー。日本初のサマータイム実施…5⇒9, 時刻を1時間早めて。プロ野球で初のナイトー 横浜ゲーリック球場で、巨人対中日戦が。福井県で大地震発生 死者3769人家屋全壊6000戸にのぼる。米軍の勧めにより警視庁は 犯罪専用電話110番を。

小倉市で初の競輪開催4日間で 55000人が来場する。映画…酔いどれ天使、夜の女たち、王将、三百六十五夜、肉体の。門。歌では…愛の灯かげ、流れの旅路、フランシスカの鐘、男一匹の歌、湯の町エレジー、長崎のザボン売り、異国の丘、たそがれの恋、東京の屋根の下などが流行した。

NHKトンチ教室が人気番組、ロンドンでオリンピック開催も子どもの日制定で当日 東京から小田原まで『子供列車』が走りその 原稿を運ぶ伝書鳩が 事故で災難にあった記事が あっち死を傷む詩を石原が書いたら 当時NHK大分の児童合唱団の杉田指揮者が作曲して 放送その功労を悼んだ事も。こげなエピソードもあった昭和23年の 回想記録からじゃけん。



24年…チット落ち着きも出ち 祭りどまけっくしゃ賑やこうな
っち 若い者んのはけ口もゆうなった。青年団が頑張ると 子供会
も負けちやらんじ 寺町かる広がったんが 盆頃にゃ本町いっばい
なっち 『若草子供会』になった。そりー青年団が指導ん 応援も
するき張り切っちよる。子供会館も作っちくれた。

一軒の家ん土間を貸しちくれたき 手弦ん人ん世話じ大分図書館
かる 巡回文庫を借り受けち 毎月30冊が子供たちに 回された
もんじゃき 読書熱もたかまった。盆踊りにでん着飾ったもんじ
なんと美しい事じゃった。晩の練習も町筋じするき 電音 かけちく
るるしもあっち 手は揃ったもんじゃった。

天皇巡行がこん年あっち そんな時間の中に馬ん飼育に 熱心な人
ん2人が特別な 拜謁になった。御手洗吾一郎さんな 親子馬を引
きつれちお褒めの言葉も 直接頂戴したち感激しちよった。大分県
の各地を一巡しち 人間天皇の証を庶民と過ごすそん 姿は誠に涙
ぐましいもんでんあった。

九州ん第1回引き上げり列車は大分にも。こん年にゃ日の丸ん使
用も許され 体面交通実施になっち右側通行に。酒類の統制が解除
されお年玉つき年賀はがきも発売、野菜も自由販売になった。料飲
店再開。湯川博士がノーベル賞受賞。米の値段も1725円になっ
た。

法隆寺金堂が漏電で火災全焼、国宝壁画12面も焼失。東京消防
庁が火災専用電話として119番設置。ビヤホール復活し東京じゃ
21ヶ所が営業再開。後楽園に初の国営競馬の場外馬券売り場が
設置。新制国立大学69校が 各都道府県に設置し駅弁大学とも
言われた。下山、三鷹、松川事件など国鉄の事故が 相次いで発生
した。フジヤマノトビウオの異名で 古橋広之進が世界記録を続出
する。ソ連かるん引き上げ船も 2000人乗せち舞鶴に入った。

映画…青い山脈、晩春、銀座カンカン娘、野良犬、悲しき口笛
なんかが上映されよった。歌ん世界は歌謡曲が多うなった…月よ
りの使者、東京の空青い空、青い山脈、母紅梅、イヨマンテの夜
、長崎の鐘、三味線ブギウギ、かりそめの恋、みかんの花咲く丘
、なんかが盛んに歌われよった。

子供会大分連合会大会が 春日公園じあっち野津原かるも 本
町若草子供会が参加。大分バスンボンネットに高い幟旗を靡かせ
ち 車体の横にゃ洗たく張り板を利用 子供会大会のプラカード
を付け 大分に乗りこむのにバス会社も 快く協力してくれた。
帰路は公園から大分駅まじ 歩いての演出が注目もされた。

帰って子供会館で ご苦労様と休憩すると 電気がパット灯い
たき 皆んながタマガルト 小野久一さんが『会社のご褒美で』
と 笑顔で紹介しちくれた。頑張った子供会にこげな プレゼン
トもまっちょたな うれしいな。こん頃ん会員は80人が5班
に別れち 一緒に切磋琢磨しよったんは 思い出に鮮明に残る。

25年…朝鮮動乱特需ブーム、千円札発行、パチンコ大流行、
魚、味噌、しょうゆ、たばこが自由販売に。社用族流行の頃。
吉田内閣で米の価格は2064円じゃつた。

水素場爆弾が実験され 帝国銀行毒殺事件の平沢被告に死刑の
判決。キジア台風大分県を襲う。マッカーザー警察予備隊創設を
指令。臼杵市発足。大分大学開学。

野津原中学校校舎落成式じ『子供会の歌』発表。子供会文化祭
開催、大分市子供会連合会の研修会《教育会館》に 参加しち
若草『子供会と若草文庫利用』の 体験発表会に参加する。活動
が認められて 実績の積重ねがこの後 27年に県知事表彰に
結びついちいった。



この年から年令ん数えかたが 満年令になった。聖徳太子ん新
1000円札が発行され、山本富士子が第1回ミス日本に入選。
短期大学149校が発足。巨人軍の藤本英雄投手プロ野球史上
初の完全試合《対西日本戦》、国宝金閣寺が青年僧侶の『美に対
する嫉妬』から放火され全焼。

映画…また逢う日まで、きけわだつみの声、暴力の街などが。

歌の世界…越後獅子の歌、あざみの歌、イヨマンテの夜、買物
ブギ、白い花の咲く頃など。

生活…電気洗たく機が売れ始めた。パチンコ大流行、ほとんどの
統制物資も自由販売になった。

◇◇◇ 方言説明 ◇◇◇

67P やっぱ…やはり。まゝまあん…まずまずの。でん…でも。
これかるが…これからが問題。そげな…そんな。チッ
ト…すこし。こそ…こそ。なるめ…なゝ…ならないでし
ょう。のうじ…なくて。トーイモ…甘藷。サンクリ…計
計画が。じゃき…ですから。

68P どげじゃつた…どうでしたか。

69P セツナギー…悔しく悲しい。ドウニンナラン…どうにも
ならない。サカシカリヤ…健康で元気なら。ハリコミヨ
ルト…頑張っていると。米価格60キロ…当時ん政府公
定価格。もんじゃき…ものですから。

70P あっち…あつて。こげな…こんな。オランダン…いなく
ても。ヨバレチ…招待案内されて。イケウチ…親戚関係
の家や人。★ 天皇巡行…戦後天皇が全国を巡行しち
戦争んつめ跡を見たり ご苦勞をねぎらう旅行で 大分
県には24年に回られた。

71P けつくしゃ…結構。かけちくる…世話してくれた。

71 P はけぐちもゆうなった…力や知恵の出し場もでけち
エネルギー発散もできる。手弦…人脈による連帯によ
った 企画が常にうまく行く。かけちくる…音響など
ん加勢もしてくれていた。年賀はがき…現在のはがき
の出始め、3円のに寄付金が少しつついたもの。

72 P 大分バスの協力…子供会活動にゃもう全面的に協力し
ちくれちスポーツ大会参加の 当日はいろんな面での
迷惑を快く引き受けてくれた。
電気の協力…若草子供会館に突然 明かりが灯ったの
も 小野久一さんの口利で 特別に会のある夜は灯し
てくれた。
泉屋さん…子供会文化祭の会場に貸してくれち 作品
展示などに終日使わせちもろうた。

昭和26年…大野川発電が発足しち 試験通電開始、民間放送
ん『ラジオ大分』開局。津久見市政施行、全国に公衆
電話《交換手受付で》開始。美人交換手が対応して
相手呼び出してつなぎ 通話ができた。

一般家庭からの通話で 混み合い早く頼みたい場合は
『普通通話電話』で忙しい時には 『至急』で又は『特
急でお願い』と 申し込むとその手立てをして つなぎ
料金はその分 格差があった。その場合は料金をその場
じ聞き 家庭の電話機の場合は 請求書で払いこむ事にな
ちよつた。やっぱ金ん世の中じゃな。

世相…糸偏景気、五百円札発行、米屋の登録制。コールドパー
マ流行、ラジオ体操復活、ロングスカート流行。ほんの2、3
年の仲間えこげ一 世の中目まぐるしゅ 変わっち行くんが。
でん貧しさはまだじゃが 心はたしかに豊かじゃつたごたる。



男性んショートカット流行、正月に第1回紅白歌合戦の放送に
ゃ 男女それぞれ歌手が7人ずつ 出場。名古屋で始まったパチ
ンコが 全国に広まり大流行となった。大阪市に初のワンマンバ
スが登場 6台が初運転を始めた。プロ野球第1回オールスター
戦が 甲子園球場で開催。

東京銀座に街灯106本復活、東京都内の露天6000軒が廃
止。浅香光代、大江美智子、松竹演芸場で女剣劇公演。以後ブー
ムになった。NHKレビが正式放送を開始。朝日、毎日、読売な
どが夕刊再開。

日本初のLPレコード《コロムビア》発売。5球スーパーラジ
オ出現。

映画…カルメン故郷に帰る、自由学校、めし、麦秋、愛妻物語
。歌…さすらいの旅路、私は街の子、あの丘越えて、高原の駅よ、
さようなら、などが。

※ ソフトクリームが 進駐軍によって持ちこまれて ひろがり
はじめた。

大分合同新聞も 朝、夕刊セット発行《5月1日より》

童話会…心ある人たちが戦後の 幼児教育、子供会組織に関心が強
うなっち 各地にそげな世話をする 青年組織が次々と
発足して連携を強め 童話の話合い交流がはじまった。時
も同じゅしちNHK=IPより 『若草子供会ん歩み』ん 放送が
取り上げられち 発足かるわずか5年めに 県内に多くのファンも
できたごたる。

それだけ地域ん少年教育が がらりと変わったもん
じゃき 学校も難しかったんかん知れん。童話ん交流がやんがち
伝承、民話ん発掘にも連なっち 行くこちなるが起伏は大きい。

美しさと貧しさの共存

大友氏の没落後、豊後は大友勢力の復活を恐れたき 徳川氏は巧妙な地勢応用策じ 10万石以下の小藩に分割した。然しいわば暗黒の時代の政治ん 流れん中でん先祖たちゃ 異常なはず英知をもっち 辛抱強う非力と政治ん 矛盾を乗り越えち 文化的に江戸、京坂に比べち劣らん 成果をあげよった。

小藩の非力 産業なんかん後進性を 子弟ん教育に人材育成によっち 補うちする熱意ん 現れでんあろう。そりゅう進む人ゃ 支援する人たちん連帯は そんなま継続されち来た。そげな土地柄、人間性も低流にあるもんじゃき いつんなかめ一か定番になっち そんなまいつんなかめ一か 自然に継続しよった。

戦後ん21年の供出割り当ては 米穀類は435500石。じトイモは10267000貫じゃつたそう。ムトウな数量じゃつたが 知事もそれなら県民も 『よしやれー』ち おしまくるごつでーたち言う。野津原ん場合も勇ましかつた 村長に肩お並べち出す そんな小気味んいい事。苦も見たけんどな。

22年にゃ農地ん開放 喜くうだ百姓したちゃ もう小作納めん時代は終わつち 天下晴れてん農家になった。が地主がムゲネ一千年ん暮れにゃ コソツト米を持参したしも あつたそう。開放した農地は2万ヘクタール まゝ見事に小作人の物になつたがそれかるが 大事でんあつたごたる。

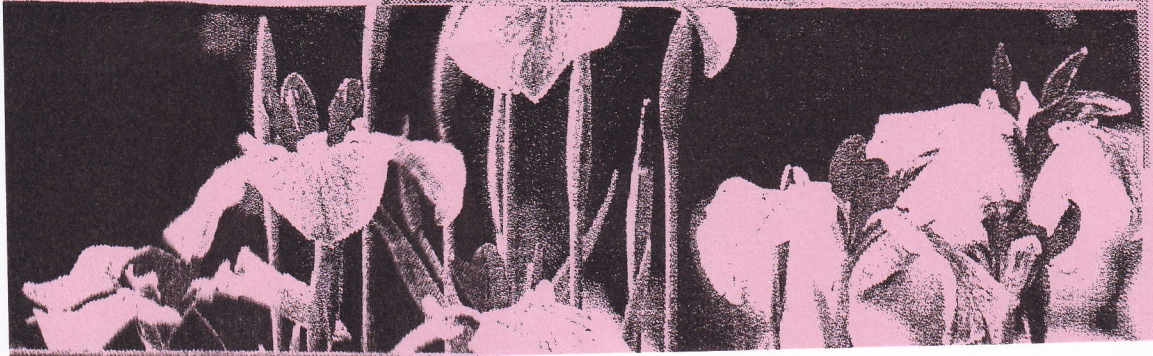
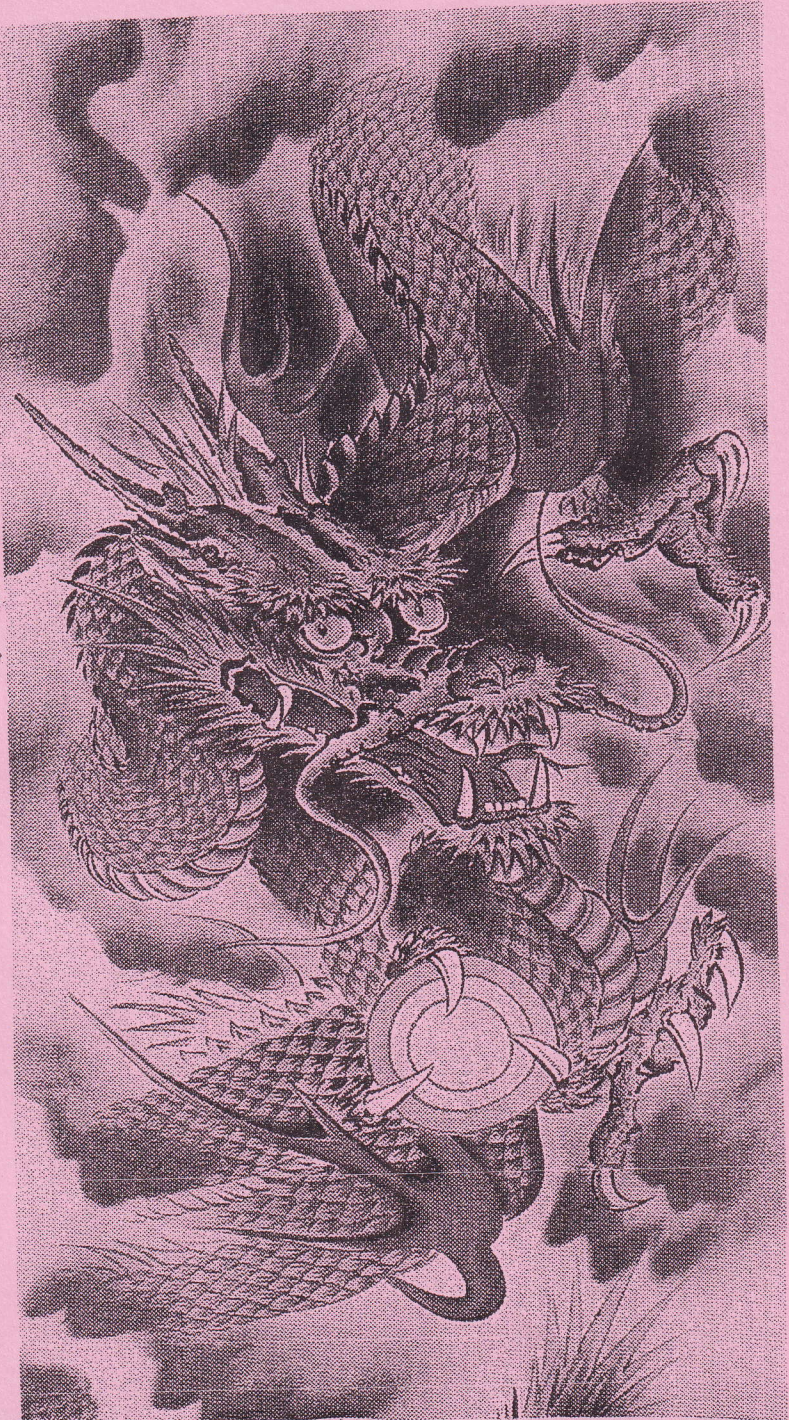
県の広報『県政の窓』も発行。県政情報、財政方針、なんかも公表され 教育民生部、農地部、土木部、農地課、労政課なんかもできたごたる。そげな中じ台風は 何べんも大分県にゃ来ち もう被害も多きかつたが ゆうまゝ性根がひじいき ホタリナゲながら頑張つた 戦後ん生活環境じゃつたごたる。



ふるさとの民話

のつはる

物語



ふるさとの民話 のつはる物語は 平成19年3月に『野津原
伝統文化継承の会』が まとめて野津原支所が 発行したもので
この内から今回は 5編を紹介いたします。

『咳のお地藏さん』

こん話しゃ おばあさんが 若かった頃んお話。畑ん上に大け
なクスン木のそべー お地藏さんがマツラレちよつた。ここん
お地藏さんな『咳にゆう効く』ち 評判じゃつたき 多くん人た
ちが線香やら 花をもっちお参りに 来よつたそうな。

ある日んこと お地藏さんの前の 道が狭いもんじゃき おじ
いさんが広く するごつなつた。そん近くにゃ 大きな岩場が
あっち そりゅう砕くなぁ おおごどん ごたつた。

岩を砕きよつたら 誤っち飛びちつた 石んカケラが お地藏
さんの首に当たつたもんじゃき おじいさんな とてん心配しち
すぐ 手当てすると 別ん位置に移すこち しました。

ある風ん強い雨降りん夜んこと おばあさんが 急に熱をだし
ち 『寒い、寒い』ち 言い出した。そしち2, 3日熱が続いた
けんど いっこうに下がる気配がねえき 家ん人が心配し どう
もおかしいと 祈とうし に見ちもらいました。

『お地藏さんが倒れち 雨じビショヌレになつち 寒がっちょ
る』 そんために どうやら 『おばあさんが 熱を出しちよる
よう』 そう言われた 家の人たちは 早速お地藏さんの 所
に行つてみると お地藏さんは倒れ それに雨じ ビショヌレに
なつちよたんです。

お地藏さんは移したが まだ お堂が無かつたんでした。

そこじ おじいさんな きちんと お堂を作って そんお堂に
お地蔵様を移し 『慌てて ご免なさい』と おわびしたので
お地蔵さまも きっと喜んだのでしょう。

不思議なことに おばあさんの 熱も下がって 元気になり
病気もようくなりました。おばあさんも 早速 お地蔵さんに参り
お礼を言いましたが お地蔵さんも 嬉しそうに見えました。

今でも この お地蔵さんな 咳によく効くち 言われるき
お参りに来る人が 多いようです。

またこの お地蔵さんは 子どもが 大好きじ 遊びに行くと
とてん にこにこしているごたる もんじゃき 子どもも そば
じ遊んだり 時にゃワヤクしたり するけんど 怪我もセンジ
ゆう 遊ぶち 大人も喜んでいきます。

いつも可愛い 花がさしちやるんな きっと子どもたちが
あげよるんじゃろうな。

◇◇◇ 方言説明 ◇◇◇

77P こん…この。頃ん…頃の。大けな…大きな。そべー
…側に。マツラレチョル…供えてお祀りしてある。
ここん…ここの。ゆう…よく。来よったそうな…来て
いたようです。もんじゃき…ものですから。ごつなっ
た…するようになった。ひりゅう…それを。ごたちち
…ようでした。よったら…していたら。こち…ことに
。そしち…そして。けんど…けれど。がつちよる…苦
勞している。

78P そこじ…そこで。ごたる…ようです。ワヤク…悪戯。
もんじゃき…ものですから。



『工藤三助物語』

むかしむかし 江戸時代のことでした。野津原にゃ 芹川やら七瀬川があるけんど 谷より高い台地にゃ 川かる水を 引けんき苦労しよったんです。

そんなために 雨水やらチットん 湧水じ田んぼを 作りよったもんじゃき チット日照りがつづくともう水不足じ 米やら作物う作るに 難儀をしよったんです。

そんな頃 毎年んように 水不足に悩みよる 村人たちを見ちなんとか こん高台まじ水を 引いち来るこたゝ 出来め一かち考え 調べたあげくに 思案しよったひとが おったんです。

工藤三助さんは それに取り組むこちなっち 水路ん通り易い場所を 捜しはじめたんじゃつた。山ん中をアングコンゲ 見ち高さも 場所も そりゃもう 大事じゃつたごたる。

そんなころは 豊後ん国はく多くの 殿様が納める 領地じゃつたもんじゃき そんな土地に勝手に 入るなんかはトテン 出来ん話でんあった。ひょいと捕まれば 殺されるかん知れん。牢屋に入れらるる事じゃつち ある。

じゃき人目につかんごつ うまい具合に『キコリ』に なったり 『たばこ売り』に なったりしち 夜もあれこれ 知恵を出した方法じ まゝそれこす 大変な苦労が続いたごたる。

そうこうしよると 百姓したちも 顔なじみになると 話相手にもなっち まさかそげな事たゝ 知らんもんじゃき 詳しい地理も流れも 解るごつなっちよつた。がさて 水を引くとなりゃ とてん他所の国の領地 悩みが多かったごたる。

苦労した年月じ えーと水が引けそうな 水路ん予定が出来ち
さて これからん手続きが 問題になった。隣ん竹田領地かるん
水を もらうんは とてんとてん 難しい問題じゃった。

『よし 当たって砕けろ』と 決心しち竹田ん殿様に お願い
に出かけました。一生懸命に『お願いいたします』と お願いを
続けましたが 首をたてにふって くれません。

それが領地の境でん 水を引くなんかは とてん考えられん話
じゃねえ。よそん領地に水を引かせる とてん考えられん 話じ
ゃった事なんで。じゃがそん水がねえと 水路は出来んのです。

三助はそれでん なんべんでん殿様に お願いん行き帰りが
もう『あきらめたか』ち竹田ん殿様が 呆れるまじ続いたもんじ
『こりゃー気骨んあるやつ』と 感心しちしもった。それにゃ
自分の儲けじゃねえ 村人を救う為の そん熱意に やっぱ打た
れたんじゃ あるめーか。

とうとう殿様が 熱心さに心動かされ 川の水を引くこつう許
す こちなった。人ん心を動かす 並大抵じゃなかったが 人ん
相手を見る心は やっぱ持ちてえもんじんある。

三助は早速工事に着手 険しい山から山に 切り立った谷から
谷にと 沢山な人ん力を図面に従った 工事は竹田領地の中じ
時にゃ音もたてながら 時にゃ話し声賑やかな それでん一度
許した三助の熱意にゃ 文句もいやがらせもノウジ 順調に進み
工事の人たちにも 殿様に感謝する 気持ちを忘れぬよう 厳し
く言い渡して進めたと言う。

必要以上の場所は荒らさん。後かたづけはキチンとする。人に
オオタラ『あいさつを きちんとする』 なんかも厳しく。

皆んなも働いた 案外調子ゆうじ 進んじコリャよかった ち
喜びよった ある日のことじゃつた。これまじ出会ったことも
ねえごたる 大けな岩にブツカッチ しもうた。

じゃもんじゃき 工事は進まんじ 鑿じ砕いた石んコケラは
一日にエート弁当箱 いっぱいぐれしかねえ。代わるかわるに
鑿う打つが ビクトンセン 大けな岩にゃ もう困っちしもうた
。

『どうしたことか』 三助さんも 工事しよる人たちも もう
齒がいいやら 悔しいやら 情けねえやら。時間はなんぼあって
ん どげもならんじ 今日も弁当箱いっぱい えーと。

金はかかるし そんうち人夫たちも 仕事がハカドランキ 気
のどきーち ヨコウ しもでだした。

困り果てた三助さんな こん岩場に座っち 不動経を唱ゆるこ
と 33日間。もう三助さんも 瘦せひこけちシモウタ。工事ん
人たちも諦めち 来んごつなつたしやら 他ん仕事じこれん人も
あっち チットウになつちよつた。

真剣に不動経を唱えること 33日が過ぎた頃じゃつた。三助
さんがん 夢枕に不動様ん お告げが知らされた。

『岩の上じドンドン火を燃やしち 岩が真っ赤になった時
い すぐ水かけち岩を砕く』 そすりゃ……ハッと目がさめた三助
さんな 早速皆んなに 『こげこげ』ち話した。けんどもう他ん
したちは あんまり相手に しちくれんじゃつた。

一人じお告げん通りに 岩の上じ火を燃やし始めたき 他ん
したちも チットズツ又 加勢するごつ戻っち来た。山にゃ煙り
がムクムク。真っ赤になった岩に 一散に水うかけたところ。

あげ一固かった岩が ジャラジャラまるで 砂利をへネクル
ごつ砕けち 三助さんの執念が 不動様を動かしちくれた そ
げな有難い嬉しい思いじ 涙がほこりじ汚れた 顔を流れよる
。

こん岩が取れたもんじゃき こん後は工事もハカドッチ み
るみる予定とおりん 仕事が出来よった。5年ほずかかったが
遂に そんな願いは完成しちくれた。三助は完成後 岩堀に使う
た槌や鑿なんかを 不動岩近くに埋めち 感謝の意味をこめち
槌塚を造った。

こん井路が出来ちからは 田んぼも多うなっち 米もガイト
出来だした。こげ一しち野津原ん農業は 特に稲作を考える時
忘れちゃならん 功績者は工藤三助さんち思うが。

★ 当時は『カギオノ井路』ち 言っていたが改良重ねて 今
は『世利川井路』と言われよる。

□□□ 方言説明 □□□

79P チットン…すこしも。もんじゃき…ものですから。お
ったんです…いたのです。アンゲコンゲ…あっちこっ
ち。トテン…とても。キコリ…山師仕事のひとたち。
そうこうしよると…間もなくして。

80P えーと…やっど。とてんとてん…とてもじゃないが。
たてにふって…承知とは言わない。じゃが…ですが。
気骨…しつかりもの。ノウジ…なくて。キチント…正
確に。オオタラ…出合ったなら。

81P コリャ…これは。じやもんじゃき…そのようになった
ので。ビクトンセン…微動だにしない。ハカドラン…
能率があがらない。ヨコウ…休む。



『お礼の踊り』

春んぼかぼか陽気ある日じゃつた。天女が下界を雲の間から
見りよった。すると宇曾山のふもとを 走りまわっち遊びよった
女ん子が 小石にツマズイチ こけち足うクジイタごたる。足う
じっと見ちゃ又 泣きだしそうになる。そりゅう見よった天女は
『どうしゅうか』ち ちょこっと迷いよった。

やっと起き上がった娘は 痛む足かる流るる血を じっと見よ
ったが 大粒ん涙を流しち とうとう泣きで一ちしもった。

気持ちん優しい天女は じっとしちよれんじ 番兵んすきを見
ち するするっと下界に おりち来た。『痛いの 可愛いそうに
どうしょう』 あたりを見回しち 川ん側にあつた フツを取
ると両手じ いっしょうけんめいに 揉むとそん葉っぱを 娘ん足
ん傷口に じわっと張りつけた。

不思議なこち一痛みが止まったんか 娘も落ち着いたんか 涙
がえーと止まると じっと天女ん顔を見上げた。優しそうな天女
を見ち 嬉しさが体じゅうに 伝わちくるごたつた。

『心配せんでんいいのよ 天から見ていて 心配じゃから下り
て来たのです』 娘は立ち上がると ペコリと頭を下げ『お礼に
何をしましょうか』と 言うとき 天女は『踊りを見せてくれます
か』と 言いました。

娘は体にいっぱい 木の葉やら花やらをつけると 手振りもよ
く 上手に踊って見せました。あまりの上手さに 見惚れていま
した天女も 時間のたつのも忘れて いかにも楽しそうでした。

じゃもんで 時間のたつのも ついつい忘れてしまいました。

ひょかっと気がついた 天女が『あらもう 暗くなりそう』と心配になりました。娘も折角 仲良しになったのにち 少し寂しくなったごたるが こんままちゅ訳にも いかんもんじゃき 『もう帰らないと またきつと踊り見せて』

そう言うと天女は 雲を呼び寄せて 天上に 上がってしまいました。

いつまでん 見送っちよる娘ん 目にゃ又 涙が溢れちよつたごたる。でんこんままにゃ なられんもんじゃき 諦めち又いつか きつと合えるじゃろうき それまで待つこち しました。

家に急いじ帰りかけたが 又足が痛みだしました。そりゃー一生懸命に 踊って見せたからでん あったんです。無理に使ったからでん あったんです。それぐれー娘も 嬉しかったんです。

それが元じ 娘は寝ついち しまいました。『もう治らないかも……』 そげな事も考えました。が娘は 『踊ったので足が痛くなったなんか 考えてはいけないとも 思いました。折角 お友だちになったのです。その人のセイにしては いけないことです。

寝たままになって 何日たったでしょうか 娘があ的那天女と遊ぶ夢を見ました。『こっちに いらっしゃいよ』 手招きする天女に 思わず手を さいだしました。天女はその手を しっかり握ると 静かに天上に引き上げて くれたのです。

夢のなかで娘は 天女とニコニコしながら 楽しく遊んでいました。天女のご恩返しの 案内かも知れませんね。



それからの二人は 天国で仲よく過ごしち 踊りを見せたり
お話し聞いたり 楽しい日々が過ぎたそうです。

◎◎◎ 方言説明 ◎◎◎

8 3 P じゃつた…でした。天女…天に住む娘神。下界を雲の
下の世界。遊びよった…遊んでいた。そりゅう…それ
を。どうしゅうか…どうしましょうか。ちょこっと…
少し。でーち…だして。じっとしちよれんじ…落ち着
かなくて。フツ…よもぎ。じわっと…しずかに。こち
ー…ことに。えーと…やっど。ごたつた…ようでした
。じゃから…ですから。じゃもんじ…ですから。

8 4 P ひょかっと…突然に。あらもう…そんなに早く。ごた
るが…ようですが。いかんもんじゃき…そんな訳にゃ
ゆかないので。もんじゃき…ものですから。そりゃー
それは。見せたからでん…見せたためでも。それぐれ
ー…そのくらいは。セイにして…理由にしては。さい
出した…差し出した。

8 5 P 過ごしち…過ごして。



『孝女と大蛇ん話』

むかし判田かる野津原に 気の優しい娘が嫁に来ちよつた。
こん家にゃ年寄りん おじいさんが おりました。若い夫婦が
野良仕事に 出かくると おじいさんな 山に行っち木を切り
炭を焼く 仕事をしよつたんと。

。ある日のことじゃつた おじいさんな 山に木を切りに行
つたが 誤っち木を背負つたまんま 谷底に落ちてしもうた。

そん日の夕方になってん おじいさんな帰っち こんもんじゃき 夫婦は心配しち 山道をアングコンゲ 捜しまわっちょつた。すると どうじゃろう谷底かる ウメキ声が聞こえたかる 急いじ降りち行くと 倒れちよる おじいさんが見つかった。

夫婦は苦しんじよる おじいさんぬ 急いじ家に連れち帰ると 手当てを したんじゃが いつまでんウンウン 苦しむもんじゃき 困っちしまいました。『どげしたもんか』 思案にくれちよた時い ふと 嫁は打ち身に効く薬が 判田ん実家にあるこつう 思いでえたんです。

留守を夫に頼むと 暗すみ道を一人じ行くこちしました。銅製ん鏡を胸にさげ 一人タイマツを頼りに 夜道を出かけました。大藪ごしゃ昼でん男しでん オジイヨウナ場所じゃが 嫁は薬ゆ 貰いたさにもう そげんこつう考えちよれんじ スタスタ歩きました。時にゃイドラに ひっかけられたりしち。

いっとき行った所じ ちょいと前を見ると なんと大蛇が道をふさいじよつた。大蛇はタイマツん灯が オジカッタンカ向かち来ません。じっと動かないき 『あなたはココン主ですか 私 は先を急いでいます どうか道を開けてくれませんか』 嫁は自分の用件を話したところ 大蛇は『ついて来なさい』と 言うように前を進みました。

大蛇の道案内んおかげじ 夜もあけんうちに 家に着くことが出来ち そしち薬も分けて貰う それもできました。急いで家に帰り着くと 痛む体で待っちょる おじいさんの打ち身の 手当てをしました。するとアゲー痛がっちょつたに 不思議と痛みが取れたんか スウスウ眠りだしたんです。

ほっとした嫁さんも 大役を果たした思いじ座り込みました。

おかげじ おじいさんは たいそう元気になったんと。嫁があん大蛇に出会った頃 おじいさんを 見ていた夫が『金色に輝く大蛇が 嫁を隣村まで案内しちよる』 夢を見ちよたち 言うんです。

女一人ん身じ夜ん山道を 6時間もかけちでん 歩き続けち おじいさんがん為に 薬をもらいに行った そんな親孝行に大蛇もきっと 心打たれたんじゃろう。じゃき応援したんじゃ あるめえかなえ。こん話は 大藪越しに語り 継がれちよる話です。

●●● 方言説明 ●●●

85 P きんな…さんわ。しよったんと…していたのです。判田地域の名前で大分市大字上判田の内。

86 P こんもんじゃき…こないものですから。アングコンゲ…あっちこっちに。どうじゃろう…どうでしょう。ウメキ声…苦しむ声。じよる…くるしんでいる。したんじゃが…したのですが。どけしばたもんが…どうしたものか。実家…生まれた家。銅製の鏡…魔除けに。タイマツ…松の根の肥えた部分を燃料にした明かり。アジイヨウナ…おそろしいような。そげんこつう…そんなことを。イドラ…のぼら。ちょいと…少し。ふさいじよつた…ふさいでいた、通せんぼ。ココン主…ここの神様。あけんうち…あけないうちに。アゲー…あんなに。スウスウ…気持ちよさそうに落ち着いて。座り込む…安心したあまりにそこに座り込む。

87 P しちよる…している。かけち…かけて。じゃろう…でしょう。じゃき…ですから。あるめーか…じゃないでしょうか。★ 家伝薬…その家に古くから伝わる 独特な薬で薬草や技法で作りに出した いわば漢方薬と言えるでしょう。効果があるので大切に受け継がれちよる。

『報恩かずら』

そんな昔 平助は病気に寝ちよる 母を残しち今日も 降る雪ん
中じ山に『かずら』を 取りに行ちよつた。かずらを取ち
炭俵を編む ふんと細々とした暮らしを 親子二人じしよつた。

お昼をチット過げた 頃じゃつたか 家かるもっち来た冷てえ
『栗飯弁当』を 開いち食べようかち 思うた時じゃつた。

みすぼらしい旅ん 老人が疲れはてたゴタル 足取りじ歩いち
来たぬ 見ちいかにも 疲れたそんな足取りに 今開いてばっかし
ん弁当を 差し出しち『一緒に食べませんか』ち 勧めた。老人
もヨッポズ嬉しかったんか おなかも空いちよつたんか まるじ
座り込むごたる 格好じそき一腰かくると おし頂いた姿はもう
かなりんお年寄りんごたる。

お礼をいいながら 冷たい栗飯を食べ始めた。もう何年も遍路
しよるんじゃろう 頬はおてち瘦せた姿は ヒョイトスリヤもう
なん日も 食べちよらんのかん知れん。

食べ残った分も押し返すごつう 『よかったらお持ちになち
又 食べたいときにでも』と 渡した。老人は先を急ぐのか それ
を丁寧を受け取ると 粉雪の舞う道をトボトボと 歩き始めた
。

見送ったものの 老人の事が気になち 後を少し追いかけち
坂の 下まじ足跡を辿ち行くと そんな老人から声をかけられた
。『ご恩返しは出来ないが 少しカズラを取って 先ほどカズラ
取りした場所に おいてあります。芝を払って使ってください』

粉雪が舞うので すぐ引き返した平助は そんなコンモリ積まれ
た 芝を取ち見ると なんとそこにか沢山の カズラが山のよ
うに積んじありました。平助にしちみりゃ気持ちん弁当じゃに。

老人が歩いち行く　その後ろ姿は　降る雪に足跡も見えんごつ
なっちシモウタが　平助は目頭がアツーなった。

ほんの思うち差し出した　粟飯　それも冷たかったに　いかにも
美味しそうに　食べちくれたあん　横顔。優しい仏さまんよう
な……いゃもしかしたら　仏様が貧しい　平助母子に　ムゲネ
エち思うち　加勢しちくれたんか。

それとん　宇曾ん天狗さんじゃつたんか。

家に運んじ　雪も降るき　早じまいした平助は　家に帰ると
母親に　こんこつ一話した。『じゃつたんな　やっぱハリコミヨ
ッタキ』　涙がこぼれち　母親は嬉しさに　目の前が霞む。

△△△ 方言説明 △△△

89 P 歩いち…歩いて。見えんごつなっち…みえないようにな
ってしまい。シモウタ…しまった。アツー…熱くなり。
ほんの…軽い気持ちで。冷たかったに…冷たいのだった
のに。くれた…くださった。あん…あの。ムゲネーち…
かわいそうにと同情して。くれたんか…くだつたんじゃ
ないだろうか。

88 P かずら…つるのような植物を利用して材料にする。みす
ぼらしい…貧しそう。ゴタル…ような。ヒヨイトスリ
ャ…もしかすれば。トボトボ…足取りも悪く疲れ果てた
ような。コンモリ…小さく平らに盛られた。食べちやら
んのか…たべていないような。しよるんじゃろう…して
いるのだしょう。まるじ…まるで。ふんと…本当は。

宇曾山…野津原の東南に位置する　子どもの虫封じに靈験あらた
。

★★★ 道するべ ★★★

人間な詳しゅ何でん知っちよる ち自分な思うちよるが 案外知らんことが多いもんじ まゝそれが人生かん知れんが。そこじ能力やら博学んしが 物知りがハリクウジ 世のため人ん為ん案内役になっち皆んなを 引き連れちくるるが 平和な約束にもなるごたる。自分さえヨカリャじのうじ 皆んながユウなりゃ 自分もユウナル そげなくみがこん頃は クズレヨリヨル。

先人が実際に体験した事かる 自分がん思い考えをタシチ そん答えを2じ割ると 平均点がでるんじゃが 早取りするしがおるとドンナコツしよると 残りが少のうなる。困ったコンニャクじゃがなえ。そこじそん 先人たちん言う話すこつう 幾つか並べました。

§ 知ったかふりはボロも出るが 知らぬふりにゃ味もある §

子ども怒るな来た道じゃねえか。年寄り笑うなこれから行く道で。来た道も行く道もそりゃ一人旅じ 皆んなが来る道 行く道でんある。これかる歩く道ん今日ん道ゃ 通り直しがでけん道じゃき ゆう考えち間違がわんごつ するんが儲け道。心合わせん人ん道。



『福沢諭吉翁ん心訓』

世の中じ一番楽しゅうじ立派な仕事は 一生涯ずっと貫ける仕事をもっちよることんよう。一番惨めなんは 人間としてん教養んねえ事んごたる。寂しいんは する事のねえ生活。醜いんは 他人の生活う羨ましがる事。そりゃ行うんは難しいかん 知れんが人並みち思ゃそげ一 苦にもならんのじゃねえ。

世の中じ一番尊いんは 人ん為に奉仕しち 決しちそりゅ恩に
きせん事じゃろう。一番美しい事ゃ すべてん物に《者》愛情を
もつ事んよう。残念じゃが一番悲しい事ゃ 嘘うつくことんごた
る。嘘はそん時ゃぐあいゆう 繕うてんボロは出るもん。そん時
にゃもう日ごろん他ん 嘘も一緒に出ちくるき ケックシャ多う
なっち がいとなるんで。

※※※ つもり違い ※※※

人間は『つもり』が 案外ピントはずれん時もある。早く気づ
くことじ恥もかかんじすむ ことだってある。もし親しい人かる
耳打ちされたら 有難い感謝の言葉ち 思うんが得かんな。

高いつもりじ低いんが…教養。低いつもりじ高いんか…気位。
深いつもりじ浅いんが…知識。浅いつもりじ深いんが…欲望。
厚いつもりじ薄いんが…人情。薄いつもりじ厚いんが…面皮。
強いつもりじ弱いんが…根性。弱いつものじ強いんが…自我。
多いつもりじ少ないんが…分別。少ないつもりじ多いんが…無駄。

どうでしょうかな 気がついち修正する事こそ 人間本来の倫理
これからでん まだまだ間にあうんで。自分がん欠点にゃわりと
トロイ。じゃが気がつき 苦言ぬ言うちくるるしがおる そりゃ
もう信頼と見込みがありゃこす。間違いを悔い改めちこす 人間
の心は浄化もするもん。言われて正さんじゃ心配。言われち反発
するんじゃ もう望みなしじゃなかるうか。

右がいいち言われち素直に 右に行くと幸せ人生 勿論苦勞は
つきもんじゃが。右ち言われち 左に向いち行くと チョイトは
楽しい事ばかり。じゃが苦勞んねえなゃ 楽も又ねんし倍もねえ
かん知れん。『ハタラク』たゃ はたを楽にする意味んごたる。

△△△ 人生は60歳から △△△

高野山普門院ご住職ん人生訓に こげな話があったき面白い。
浄土かるんお迎えが来る が『人生は60歳から』じゃき 早う
来てん用事が済まん と 準備が出来んき待ちもらう 事になっ
ち迷惑じゃろうき 次のような返答はどげかなあ。

60歳ん頃はまだまだ 地域でん活躍盛り。社会でん現職もあ
っち顔も広い。そんな頃んや向こうも忙しかろうき そんなの立場
やら健康なんかも考えち 選別せんと大事になりゃせんか 心配
になっちくる。

70歳になっち迎えが来たら 『まあ留守と言えればいい』『ど
き出かけちゃんの』『今な太平洋ん島ん問題が』 そげな話題を
言う と『こんしゃまだ大事な役割が』ち チェックしち帰るじゃ
ろう。元気盛りんしに 慌てちあっち行かるりゃ まだまだ困る
こちなる指導者じゃき。

80歳になっち迎えが来たら『まだ早すぎるで』ち 帰っても
らやいいんじゃねえ。あっちも忙しかろうが こっちも『こんし
ゃ出番も多いし 知りたい事も聞かにならん』き やりかけた
仕事もフトロクサン 抱えくうじよるんで。取り組んじよるだけ
でん 10年さきまじゃ手が放せんきな。

90歳になっち迎えがきたら 『そげ一急いじ何事な こっち
ん用事がまあ片づいちしまわんに』 そげ一急がんでん足腰しゃ
達者じゃきな。あんたこす帰りコケンゴツしよえ。10年先でん
又あうかなあ。なしあげ一忙しゅせにゃ 手が足らんのじゃろう
かふんと こっちも忙しいになえ。そうこうしよりゃ 来んごつ
なろう。そりしてん熱心なしじゃなあ もう課長どころかな。じ
ゃ100歳かる先は又 こん続きは 続20号になあ。



会えぬ出来ぬ悔しさ

人間の躰修行に時間が惜しまるるが 限られた時間でんまに
ならんそげなシジャツチ居るもん。いつもはソゲーノウデン 時間
がままならんと イチペーそげな恨めしさも 涙にまじ誘いまくる
。『もう長う会うちょらんが』 『むげねえのう』 ままならん今
は辛抱がまんせにゃ。

炭出しすりゃチョイトは 時間もあるけど そんな時あ相手が都
合悪い 世の中ままならんのう。会わんと尚更シテエンが人情か。
『なにやそげーシチョランノカ』 『ウン…………』 生返事もゆう解
るごたる年頃 『こんだいつが都合いいんか』 『炭だしが10日じ
ゃき 次ん日ならいいき』

『コウコウど都合はどげか』 『行事が入っちよるき やっぱな』
うなだれち涙が出そうな声 『ふんとのう 目の前におんにのゃ
シタカロウガ むげのこされ』 『それで アツチもそげー思いよる
じゃろうが』 『そうぐれえか のや』 話しゅう聞くと五助さんな
『よし解った おれが会うちくるわい』

『ていげえにゃ なんとか工面せんか こき来ると悪いか』 『そ
りゃ相手もシタカロウガ ここじゃ炭まみれになっち それこそえ
すむげねえ 白い肌が汚るりゃドケナル』 『ジャロウ じゃきそく
う何とかしちの』 五助さんが言うのん解るが ここじホゲシチか
る 打ち壊しになりゃもう 惨めになっち辛抱我慢したが 無駄に
なりゃせんかち 気になり苦になっちしまう。

じゃがそげな若いしん心ん 我慢もやっぱ結局は それが勝ちに
結びちーち行くこちなった。『あんな店長さんが ゆう頑張ったき
1週間休みゅくれたんで』 『何やそりゃまたデカシタのう』 相手
ん若者にも知らせたら やっぱ転げ回るごつ嬉しかったごたる。



『さかしかったんな』『うん……』 いった時あ次ん声もでらん
じゃつたが もう長い間んあれこれが シトゥジ待つてよるが。
『こん前ん続きん話しゅシチ聞かせよ』『あれジャツタナふんな
こき腰かくりゃいいわ ちっと汚るるかん』『いーこと炭だしん
加勢に来たき 汚れてんいいんで』

二人ともそげな気持ちじゃき 汚リュと何も構うこともねえ
半月ぶりん待ちダッタ 時間が削られよつた。『ずっとセンジャ
ツタキ シカト忘れたカン』『あげんこつ言うどげん所か
でんいい事 始めちょくれ』『じゃな ほんなぼちぼち スルカナ
ジャ』 思い出は尽きんけんど 行きつ戻りつん話がえーと軌道
に乗った頃にゃ 仄かな夢も見よるごたる。

炭はまっ黒じゃが ふたりん心は純真無垢じ それにゃ染まら
んごつそよ風に 吹き散らしち行くごたる。『ふんとシタカッタ
ンデ』『ウットモそうで でんここじスルナンカ いいもんじゃ
な』 『じゃろう 黒い炭じゃきかん 知れんなあ こん白い
肌がフトロク引き立つわい』『チャーウットどげしゅう』

尽きぬ話がどこまじ続くんか シタカッタあん話 こげな話題
が行ったり来たりしち もう夕日が西ん山に近づいた。『ぼちぼ
ちイナント怒らるりゃせん』『いんげショワネエデ 晩まじオッ
テンイイガ』『リヤマァ そりゃ無理じゃねえ きちんとせにゃ
な』『じゃな ご免』

方言説明 93p シジャツチ…その人たちも。ソゲノーデン…
そうなくても。シテー…したい。シチョランノカ…していないの
ですか。ウン…はい。コウコウ…これこれ。アッチ…相手。そ
うぐれーか…その通りで。ていげえにゃ…大概には。ドケナル…
どうなります。ジャローでしょう。
シカメ…しかたを。じゃが…ですが。ウットー…私。イナント…
帰らないと。リヤマァ…びっくりしたありさま。

野津原に関わった『夢とロマン』の人たち

日本尊命《古代》…九州平定の帰路に立ち寄った 御座岳に一泊した翌朝の野津原の景観に 心和ませて祠を建て 剣を納めて『里の安寧と里人の幸せを』祈念。

源義経《戦国》…源平合戦で武勲を立てたが 兄の軍勢に追われる憂き目。大野軍団が岡城に招く途中で 愛宕城での休憩が予定されていた。叶わぬ夢に。

工藤三助《江戸》…肥後領谷村や野津原に 水路を引いて農民経済の向上に 献身的な努力をした その功績碑は 湛水にあり 坂本竜馬たちも仰ぎ見て長崎に。

伊能忠敬《江戸》…文化《1810》年間全国を測量野津原も竹田から 12月25日⇒27日まで肥後街道中心に測量 現在の基盤資料になった。画期的。

勝海舟《幕末》…軍艦奉行が密命を受けて 坂本竜馬も同伴して 往復に野津原に泊宿。『住みよい気候風土に恵まれて』と 回想日記に記されている。

一万田尚人《近世》…昭和21年日銀総裁 29年大蔵大臣。サンフランシスコ対日講和会議委員の一人。32年まで蔵相を務めた。諏訪村今畑出身。気骨人。

郷土《江戸⇒現世》…肥後領になって以来 領主の側近として郷土の発展に。律儀な施政に取り組む心情が継承されて 里の人たちの気風情愛を育てている。

このような人たちの模範が あったから野津原は現在も 経済は乏しくとも心は豊かに 明日に向かって進んでいると 信じている。

野津原のこぼれ話

大和武尊が南九州の平定からの帰路 宇曾連山じ一夜を明かした翌朝 眺めた野津原の里は『なんと和やかな素晴らしい里』と 心につよく印象にのこったので 祠をたてて剣を納めたと言う。今もその剣は 山を順番に移動して 宇曾岳に入り そこに創建した『宇曾岳神社』の奉納してある。

源平合戦で武勲をたてたのに 兄の軍勢に追われて 大野軍団が迎えようと《岡城に》 途中の野津原愛宕城に迎える 予定をしていたが行く手をはばまれて 東北に逃走したとの事。残念な話が今も語り草となって 悔しいやら残念やら。

工藤三助さんが世利川井路など 3つの井路開発に執念を燃やした 功績の碑か湛水にある。難渋した工事の苦労の場所は『不動岩の工事』 領地肥後の人たちの苦渋を 見るに忍びなかった人間の生き方は長く讃えられている。

伊能忠敬が日本中の測量を その途中で野津原も測った。当時の技術としては素晴らしい 足跡が現在も地図作成に 大きな役割を果たしている。

勝海舟と坂本竜馬が 長崎に密命で往復した途中で 野津原も通り泊まり里の味も堪能した、回想記録にもものどかな里として 人情も『もてなしの心も』滲み出ている。

春の山桜、新緑。夏のせせらぎ、螢。秋の紅葉 まつり。冬の星空に新しい年を迎える 夢を結んで。そんな故郷に生まれ 育った私たちは 故郷を愛し これからも引き継いで行く 力になりたいものです。



湛水ちゅう地区があるが 長湯かる山ん中やら ヌキう通っち
ヒョカット顔う覗かせちよる。工藤三助さんが長え間かかっち
谷や庄内だけじゃねえ 野津原にも水う 引かにゃち どんくれ
苦労したか。水が来るんが当たり前んごつ 思うと罰があたるが
今でん ここじゃ祭りがされよる。

そん取入口まじ行っち見ると ゆうまゝここかる水う 連れの
うち湛水まじもちフント 頭がさがる。

§ 岩をくぐっち ここまじ来たと
顔を覗かす いじらしさ
三助まつりに 揃うた揃うた
稲の出穂まじ よう揃うた。 § 三助踊り唄から

チットデン水が湛ると もう飛び上がっち喜ぶ。それが身に染
みちーちよるき 雨どま降ると ツボサキい穴ほっち 水ためた
もんじゃ。屋根ん水 イデン水 ジャキ水に対する 根性はもう
並大抵じゃなかった。祭りよばれち ウドンが出された。湯つけ
ウドン…ジャキ たっぷりん湯に ウドンが泳ぐこたる。

すくうちススリ食いながら 残りん湯をもろうち 帰りてえな
あち内緒話ゆシヨッタラ 『シツレイじゃが 何すんの』ち 聞
いちみたら 『これじ髪う洗うたら ピカピカするんと あなた
達ん黒髪が美しいんな そげな事もあるのじゃ ないですか』ち
申し上げた。褒められた嬉しさに 新しい湯に足した つけ湯を
帰りに持たせたら そん晩にヤウチゴッサン 髪洗いたそうな
。どんくれ 嬉しかった事か。目に浮かぶなえ。

灰を漉した灰汁じ木綿洗たくすりゃ もう見事に汚れが落ちてち
今でん 使いよるお年寄りがあるんで。こうだいなもんじゃ。

、跳ね釣瓶ん水が汲みあげらると 側に出した盥ん中に灰汁
に ツケチャツタ木綿の野良着。真新しいベベンゴツ美しい色
になった。生活ん知恵も体験すりゃこす 理屈も解り先人が
どんくれ水に苦勞したかも ピント頭に響くごたる。

§ 山が高いうち 待たるる水が
木の葉揺らしち 里につく
三助祭りの 涙に濡れち
里に帰った 娘も濡れる。 § 三助踊り唄から

『どげーな いままで水に苦勞したんじゃき 水に恵まれて
んそん 気持ちゅ忘れんごつ 『タマリミズ』に しちゃた
どげな。そりゃいいなあ いつまでん水は で一じせんとなえ
ここまじ来るきいいんで 途中じ来んごつなりゃ もう大事じ
ゃきなえ。

『湛水』なんと 響きんいい呼び名。諏訪村ん西ん端じゃが
肥後ん 殿様にゃ一番近えんで。又すぐ『タヘラク言う』『じ
ゃねえんで 有難い事じゃち思う そん心ん現れじゃこと』
『じゃなあ こりゃすまんじやった コラエヨエ』 笑顔が
帰ったのん 水ん音が優雅にも 聞こえるきかん知れん。

ひもじい時ゃ人ん言う言葉でん 腹に響くが 満腹ん時に
ゃちった『悪口言われてん』 腹もたたんごつ オオヨウニ
なれるるもんじゃ。3つん井路を作った 工藤三助さんの
功績ん記念碑が 湛水地区んなかへんに建ちよる。私財も
継ぎ込んだんじゃろうし 自身も浮動明王ん夢のお告げも
あったが それだけ浮動明王も 惚れたんかん知れん。

水ん流れ涼しげな響き 人ん心まじ涼しゅしちくるる。



『五助さんがん瘦馬』

もう夕暮れ近え坂道う ダッタゴタル馬を ヒーチ帰りよるな馬子ん五助さん 見かけは瘦せヒコケチョルガ 力は強いし気持チャ通ずるき 長年の仕事相手でんある。峠ん茶店がまゝ エーチョツタキ 片グロン畑脇い 馬をイイツクルト 『マァシヨンナ』『シヨンデ 五助さんじゃな まゝ寄んなあ』

『ありゃ今日は馬は…』『あん瘦せ馬な 畑んくりツノージョイタ』『ソリャ ムゲネエコト こっち連れちくりゃー』『エ』言われた優しい 茶店んジイサンの 言葉にホロリ涙が。『いいんな お客ん邪目ならせんの』『もう客もねえわな』『今日はピラじゃな』『で ジャキ残りじゃが 馬に食わせなあ』

茶店んおやじも 瘦せた馬と ハリコムぬ見ると ムゲノウナルキ残りもんじゃが 食わせたかったんジャロウ。馬も食い物の匂いに 元気が出たゴタル。カドグチつなぐと 手桶に ピラを入れち コカスもチット フリカケタ。『リャー済まんなあ ミヨお前ゃ働くき お接待食わせちクルルト』『オ接待 はずじゃねえが残り物んで』

うまそうに食ぶる 瘦せ馬ん顔にゃ嬉し涙が にじんじゅるごたる。時のマニクウチ シモウタ桶ん底を 長い舌じなめまわしよる。そんはず ピラにコカスマじ 馬にしち見りゅ ご馳走でんあろう。五助さんも 茶店ん親父もジート ミトレチョツタ。ガ 『五助さん チョイト待ちなあ 旨そうに食う馬ん姿にゃ憎めん何か言うゴタル 気持ちちが伝わつち来たんか。』

『思いデータ事があるき』 何事かちおやじん 手先う見よると コンダはピラに きな粉マブシタンを 桶にちっとずつ 入れよる。そん香りが盆に供ゆる ヒキマメンにそっくり。瘦せ馬が舌先ウアンゲコンゲ マワシチャ 旨そうに食いよる。なんとそんピラも 瘦せ馬んごたる。

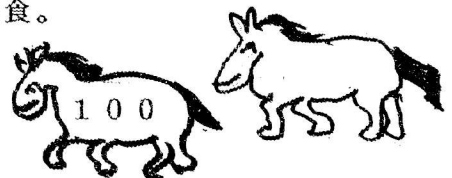
『五助さん』ダマシ 大けな声じ言うき タマガッチ振り向くと 『みなぁ 瘦せ馬が食いよる ビラは 馬ん舌とグアイユウからまっち ビラも瘦せ馬んゴツ 見えんかなぁ』 『りゃーフント舌がセリ回すあんビラは ヒキマワシンビラと一緒にゃなぁ。『どうな これかるは ヒキマワシュ 瘦せ馬ち言うなぁ』

『ヤセウマ ヤセウマ』 『いい響きで ヤセウマ ヤセウマ 決めた のれんにも そげ一書こっ』 『フント イイナァ』 ヤセウマか それが広がっち 今まじヒキマメ(シ)ち 言いよったビラが 『やせうま』としち独立したごたる。五助さんがん瘦馬が お接待受けたお礼に ヒヨカットこげな 名前が生まれた。

それかるは 峠ん名物食い物としち 評判が広がったそうな。瘦せた馬でん 頑張ったご褒美か 茶店ん親父の優しさ ヒョンナ所から 飛び出した言葉 瓢箪から駒がでた 午としにふさわしい 風物詩んゴタル 伝承が肥後街道ん 茶店にあったな一五助自身が 話 広ぐるにゃおこがましいんか。

ヤセウマ…各地に諸説あれこれだが どれが正しいとかは別としち 人と馬との関わりあい 生まれた話にゃ昔かる 馬は人の協力者としてん 大切な動物でんあった。戦時下にゃ戦地にも趣き 徴用もされた例もあり 軍馬としての唄も残されちよる。ヤセウマン由来にも 登場するんも 遅かりしの感じじゃが このとしが『午とし』ゆえに 意義もありそう。

肥後街道を行き来する 馬を代表しち飾る方言物語 仲間に入っちこれからは 愛されるんじゃなからうか。きな粉マブシタ ヤセウマ…夏の食べ物の代表としち 盆から天国に帰る仏様のみやげを縛る大切な 紐の役目も果たす。涼しい夏の食べ物として 代用食にもなり 珍客のおもてなしにも 格別な食感もあり きな粉の香りは 涼感もそそる夏の特異食。



あとがき

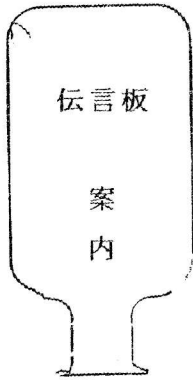
東日本の地震津波に 原子発電事故なんかあって《H23年》から 6年目になり収束ん決定まじゃ まあ時間がかかるんじやろうな。震災地にも方言集を 分割しち約40冊送り 数箇所かるは『頑張るから』と 力強い礼状も届きました。猛暑と厳寒と世界中見てん 事件事故ん多かった 年でんあったごたる。

今回は『戦後20年⇒26年』まじん 農村の生活なんかを分割《1》じ 取り上げました。復興は序序じゃつたか めざましゅ復活した足跡を。肥後街道に続いち 表往還街道も《4回》じ石合まじ辿りち一た。馬子ん五助さんが旅んしと ゆうつきあいながら歩く 故郷野津原はやっぱいいなあち 自慢しとなる。

方言集が関東、阪神なんかじ愛読しちくるるも 愛読者皆さんの支援じ発行出来るからです。あれかる26年目冊子も37冊になり 大分図書館にも永久保存してくださり 手元にのうなってん取り組んだ証は ちゃんと残りました。野津原村報かる⇒広報のつはる に続く故郷ん記録冊子としち 残されたのも感謝あるのみです。

方言単語ん分割掲載も 『こ』の『ン』まじ進み 14266語になり 次号じゃ『さ』の『ア』かる 又はじまります。最後はもしかすりゃ 20年ぐれ先かん知れんが ご支援よろしく お願い申します。読者の影の支援も多うなっち 今年ん表紙画は 版画家じ有名な 寺司勝次郎先生です。無理にお願いしましたら 快く ご了解頂き本当に嬉しい限りです。次号では水墨画長老の 酒井治郎先生のご協力です。厚くお礼を申し上げます。

ご愛読者の皆様 ご健勝にお過しの程を ご祈念申しています。又次回をお楽しみの程を。誠にありがとうございました。



伝言板

案内

続編№19号は発足26周年に 巡り会いまして『民話のつはる物語5編』を 掲載しています。素人集団が毎年取り組み発行の 方言集で全てを手づくりで 通してまいりました。限定100冊の収拾、編集、監修、印刷、製本、などおかしな冊子で恥ずかしい限りで 恐縮しています。

次号にも 戦後27年からん時代回想、表往還街道は石合から荒木谷、方言子ども、女性の底力、故郷の味、五助のあげな話コゲナ話、玉手箱、民話伝承、方言入り民話の旅、方言単語、何かが並ぶ予定です。五助が年寄らぬんも不思議じゃが ご愛読くださる 多くの皆様も 若くお元気で開いてくださる その刹那を会員一同は とても感謝の気持ちで お待ちしています。

調査編集印刷製本 スタッフ

小野寿祐、佐藤源治、那須政子、赤星ヨシミ。

大分市大字竹矢 野津原方言調査会

☎ 588-0572

☎ 588-0092事務局

